



始





特 202  
835

中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會







北 迷 藏 至

新 月





筆江夜内河大



大菩薩峠

第十三册



本冊内容新月の巻

序文

大菩薩峠は明治の末に起稿し大正の初に發表し昭和の今日に至りて猶ほ未だ完結せず、實に人類あつて以來の長篇小説也、抑も著者がこの尅大なるカンバスを用ひて描かんとする處の本意は「衆生業相ノ展開ヲ曲盡シソノ遊戯神通ヲ寫シテ入曼陀羅ノ實相ニ歸スル」にあり、この故に世の所謂藝術文學並に大衆文學とは根本に於てその性質を異にす。



### 新定版緒書

大菩薩峠は従来菊半截形の普通本が定本のやうになつてゐたが、長い間に形がチグハグになつたり、巻数が缺けたりして、折角の注文に間に合ひ兼ねたりした事もある。今度、形装を改めて十五冊を一度に揃えて、此の「新定版」を出すことになつた。この機會に組直しその他大革新を行ひたかつたが、何を云ふにも今日の非常時局の統制時代であるから、用紙その他以前よりも劣るものあるは已むを得ないけれども、これでも讀者諸君に奉仕し得る最良を盡したものであるといふことを御諒察願ひたい。なほ、その折々の巻頭言や、巻末に附した「是非」の類は此の際一切取り除いたが、これは別冊にまとめて世に頒つつもりである。なほ今までの菊半形のものも引續き讀者諸君の爲に備へて置く筈である。それから従来大菩薩峠刊行會の經營には變化もあり行違もあつたけれども、この時局に鑑みて舊縁を復し、著者と神田豊穂君と融和の下に野口兵藏君が事務に當ることになつたことを書き添えて置く。

昭和十四年四月

同人



## 三十六 新月の巻

### 一

とあと 留度もなく走る馬のあとを追うて、宇治山田の米友は、野と山と村と森と田の中をかなり向う見ずに走りました。

併し、相手は何をいふにも馬の事です、さしもの米友も、追ひあぐねるのが當然でしたが、さうかと云つて、そのまゝ引返す米友ではありません、殊に右の放たれたる馬には、ながはな長濱で買入れた家財雑具はいふに足りないとしても、たつた今兩替したばかりの何千といふお金が確實に脊負はせられてゐる、金額の多少を論ずるわけではないが、殊にあのお嬢様が、この米友を見込んで、用心棒を依頼してある、その責任感から云つても、追及するところまでは追及せずには居られないでせう。

それはさうとして、米友も亦心得た處もある、奔馬といふものは、前から捉へるに易く



して、後ろから追ふには此の通り骨だが、さうかと云つて馬といふ奴は、蝶々トンボの類と違つて、どう間違つても空中へ向けて逸走する事はない、天馬空を往くといふ例外もあるにはあるが、通例としては精々地上を走るだけのものである、あゝして精々地上を走つてゐるそのうちには前途から誰か心得のある奴が出て来て取捕へて呉れるか、さうでなければ馬め自身が行詰る處まで行つて、立往生するか、顛落するかより外はないものだ——たゞ、往來雜沓の町中でゝもあるといふと、他の人畜に危害を與へるおそれもあるが、その點に於て斯ういふ野中では安心なものだ——といふ腹が米友にあるから、焦りつゝも、幾らかの餘裕を持つて走ることが出来るのです。

處が、案に相違して、なか／＼前途から心得のありさうな奴が飛び出して取抑へてくれさうもなし、何か此の奔馬をして行きつもらせる處の障礙物といつたやうなものも容易にないのであります。

遂に一つのやゝ大きな川原中へ飛び出してしまひました。

「川へ來やがつた」

川原道を、遂にこの馬がガムシヤラに走るのです——その川原の幾筋もの流れを、むやみに乗り切つて、ずん／＼飛んで行く馬は、まだ、石田村の門前で引ばたかれた逆上が下りないで、お先まつくらがさせる業なのでせう。

やむ事を得ず、米友もつゞいて川原の中へ飛び下りました。

逆上し切つてお先眞暗な事に於て、奔れ馬ばかりを笑はれませんでした、幾分の餘裕を存して追ひかけて來たつもりも、この時分は可なり目先がもう、げん、じてゐました。

「わ——つ！」

といふ喚聲が、行手の川の向う岸から揚つて、さうしてバラ／＼と驟の雨が降つて來た時は、米友が、屹となつて向う岸を見込むと、その鼻先へ、今の今までまつしぐらと云ふ文字通りに走つて來た放れ馬の奴が不意に乗り返して來たものですから、その當座の米友は土用波の返しを喰つたやうに驚いたが、その邊はまた心得たもので、

「よし來た！」



何がよし来た！ だかわからないけれども、今迄追ひかけても追ひかけても追ひかけ足りなかつた目的物が、今度は頼みもしないのに、自分で折返し疊返して来たのですから勿怪の幸といへば云ふものゝ、この際、米友でなければたしかに引返し馬の爲に乗りつづされてしまったことは疑ふべくありません。

そこを心得たりと、身を洗めて、轡づらをしつかと取つた米友。

「どう、どう、どう——しつかりしがれやあい」

米友程の人格者に握られた轡ですから、何の事はありませんでした、その途端に、馬の逆上がすつかり引き下つたと見えて、大きな目もパツカリと見えるやうになつて見ると、疲勞そのものが一時に露出したらしく、馬相應の嵐のやうな息をついて立ちすくみの體です——こゝで米友は完全に奔馬を取捕へることの目的を達しました。

その目的だけは完全に達したけれども、前後左右の分別までが、ハッキリと手に取れてゐるわけでもなく、頭にうつつてゐるわけでもないのです。

第一、今までガムシヤラに走り續けてゐたこの馬のやつが、今こゝへ来てどうして不意

に折返して来たか、前途に心得ある人が出て来たわけでもなし、廣い河原で、これぞといつて障礙物もありはしないのに——こいつがこゝで不意にあと戻りをやり出した理由と原因とは、よくわかつてゐないので、併し、その理由と原因をわざ／＼と探し求めるまでもなく、米友の身の周圍に降りそゞく石礫が、取敢ず事の不穩を報告する。

二

片手で馬の轡を取りながら、さうして、石の飛んで来る前岸を見込むとさても夥しい人出向う岸の土手の全部が、殆んど人を以て埋つてゐる光景を米友がはじめて見ました。

「やあ、大變な人だな、蟻町のやうだ」

石の礫は、その夥しい人類の中から降つて湧いて來てゐることに相違ないが、この夥しい人類が、いつの間に、何の爲にこゝへ現はれたのだから、それは一先づ、米友の思案に餘りました。

成程、荒れ馬の飛んで來るのは危い、それ故に村の人が警戒を試むるのも宜しい、だが



一頭の家畜の爲に、これだけの人数が繰り出して來るとは——第一、馬がこの川原へ來るか來ないうちに、その危険を慮つて、これだけの人数を狩り集め得たとすれば、その人寄ひとよは人間業にじんまではない。

併し、また、他に目的あつてこゝに待ち構へてゐるんなら、何かその目的物がありさうなものだが、彼奴等あいつらの面つらといふ面、目といふ目は皆んなこつちばかりを見合せてゐやがる——だから、この一匹の馬の爲にあの人数が繰出されたと見るより外は無え、大仰おほげなこつた。

おや／＼、竹槍たけやりを持つてゐるぞ、竹槍を林の如くあの通り揃へて持つてゐる、こいつは驚いたな、タカが一匹の放れ馬の爲に、危ねえ！

クル／＼眼を廻して驚いてながめてゐるうちにも、礫の雨が、絶えず降つて來て、同時に向う岸で口々に、おれ達に向つて何をか罵りかけてゐるやうだが、ガヤ／＼して何の事だか聞きとれねえ。

米友としては、奔馬追及の目的は完全に達せられたことだし、たとひ、彼等が無理無體

に礫の雨を降らしたところで、こゝで何も好んで宇治山田の網受あみうけの藝當をしてお目にかかる必要のない處ですから、その飛んで來る石の雨は片時も早く避けた方が賢いと思慮したものですから徐ろおもむに馬の口をとつて此方の岸へ戻つて來ると、

「發止！」

これはまた、どうしたことせう、今度は戻つて來る方の岸から、礫の雨が飛んで來ました。

「こいつは驚いた」

米友は馬の口をひかへて、戻り來る岸の上を見ると、そこにも土手の上一いばい、芋いもの子を盛つたやうな人出です、それが口々に罵つてゐる、竹槍を持つてゐる、米友と馬とをのぞんで石の雨を降らしかける、それは前岸の光景と全く同じことです。

自分ながら落着いたつもりだが、まだ血迷つてゐた、向むかを換へたつもりが、實はもう一べん廻り過して同じ方向に向いちゃつたか、あはて者が馬へ逆さに乗つて尻尾しっぽを見て「おやこの馬には頭が無え」といつたが、乗り直して頭を見て「尻尾も無え」と云つたといふ



笑ひ癖がある、さうでなければ大きな鏡仕掛で、あちらの幻像をこちらへがんどり返しにうつし取つたものと見なければならぬが、事實上、米友がどちらを向いて見ても、兩岸が同じ光景なものですから、一時、どうしても、そこに馬の口を取りながら、立ちすくみの姿勢をとらざるを得ませんでした。

「わからねえ、わかねえ奴等だ」

それは、馬が馳けて行く方が用心するのは當然であるとしても、その用心か情力かで何か文句を云ひ、石の一つも投げて見ようといふ手ずさみは、まあわかつてゐるが、もうこの通り、馬も取鎖めてしまつて、さうして穩かに曳いて歸らうてえのに、その引返した方の奴が、悪口を云つてこつちへ石を投げかけるてえのは、わからねえ理窟ぢやねえか。

斯ういふ人氣の土地か知らねえが——こんな事は初めてだ、一匹の馬の爲に、まあ、見るがいよ、後から後からとあの人出は、村方總出だ。

おやく、竹槍を持つたのが、バラ／＼此方へやつて來るぜ。

また、向う岸からも竹槍を持つた奴が、バラ／＼と此方へやつて來るぜ、一體どうしよう

てんだ。

このおいらと馬とを、兩方から挟み討ちにして、あの竹槍で突き殺さずにや置かねえといふ了見か——それは愈々わからねえ、第一、この馬と、おいらが何を悪い事をしたのだ

五。  
馬はやみくもに馳けたばつかりだ、おいらはそれを追つかけて來たばつかりなんだ、老人子供の一人にだつて、怪我あさせたわけぢやあねえんだ、村を騒がせて濟まなかつたと云へば濟まなかつたに違えねえんだから、その點はおいらだつて詫びをしると云へばしねえとは云はねえよ、何もこつちも好きこのんで、馬を飛ばしたわけぢやねえんだ、馬が何かに驚いて飛び出したんだ、何に驚いたんだか、そんなことは、まだ原因をたしかめる暇もなく、おいらは斯うして追ひかけて來たんだが——何にしてもこつちに責任のある馬には馬なんだから、詫びろと云へば詫びらあな、あやまれと云へばあやまつてやらあ——それをお前、何にもこつちに一言も云はさねえで、兩岸から挟みうちにして竹槍で突き殺さうたあ酷過ぎる！



タカが一匹の馬の畜生の事ぢやねえか——まるで、これぢや戦だ——まさかこの馬が千兩からの金を積んでゐることを知つてゐて、それを取りてえから、あゝして人数か集めたわけぢやあるめえ、さうだとすれば、村中が心を合せて切取強盗を商賣にしてゐるやうなわけのもんだが、今時さういふ商賣の村といふのはあるめえ、第一この馬が二千兩からの錢金をつけてゐるかゝねえか、それまで見きはめちやゝめえがな。

おや／＼来るよ／＼、本當にやつて来るぜ、あの通り若い奴が、竹槍を持つて、こつちの岸からも御同様。

さあ、もう仕方がねえ、斯うなつたからはこつちも了見をしなくちやならねえ。

米友は川原の眞中でちだんだを踏みました、同時に、兩方の岸から、すさまじい鬨の聲が起りました。

竹槍をしいた兩岸の先陣五六名づゝが、その聲に振られて、奔馬のやうな勢で、米友を目がけて——事實、米友としては、さう見るより外に見やうが無い——兩方から殺到し來るのです。

斯うなると米友は、もはや、ちだんだだけでは許されない。

もう厭です、米友としてもこんな處でまたしても武勇傳を現はしたくないのですが、實際、身に降りかゝる火の子は拂はなければならぬ、拂つて置いて相當の辯明が聞かれなければ、もうそれまで、さういふ覺悟を定める事には未練のない男です。

そこで、足場を見計らつてお手のものゝ枝槍を二三度、素振りをして見てからに、懐中へ手を入ると、久しく試みなかつた菱の實のやうな穂先を取出して、しつかとその先きを食ひこませたものです。

その時、また、わ——つと兩岸で山の崩れるやうな鬨の聲。

## 三

全く、理不盡千萬な亂暴至極な、前後から一應の辯明もさせずに、竹槍の槍ぶすまを作つて、米友一人と駄馬一頭とを目がけて襲ひ來る暴舉、これは甲州街道の雲助でさへも敢てしなかつた處の凶暴です、併し、事こゝに至つてはいかに事を好まない米友であるにし



てからが、勢ひ決死的に應戦の覚悟を定めること以外には正當防衛の手段は無いのです、躍り立つた米友は、その應戦の準備をしてゐる途端に、何だか急に、風向が變つて豫想の當が外れたやうにも受取れる——それは自分と馬とにばかり向つて來るものと思ひきつてゐた兩岸の竹槍の槍ぶすまが決して引き返したといふわけではないが、或る地點へ來ると明かにその槍先の當が違つてゐる、向が外れてゐるといふことを米友が認めました。

當が違つて居り、向が外れてゐるとしてからが、河身を眞中にして、川原の兩岸の土手から、同じやうに進んで來ることは少しも變化はないのですが、その槍先が——つまり、米友と駄馬との焦點に向つてのみ集中し來るものとばかり信じてゐたのが、途中にしてさうでなかつたといふことが明かにわかつたのです。

ある地點で、米友の的を外してしまつたそれからは、中に何も置かず、川と川原だけでさうして、兩岸の竹槍と竹槍とが、對陣の形によつて各々兩方から取詰めて行つてゐることを米友が明かに認めました。

「なあ——んだ」

と、それを知つた瞬間に、米友が思はず力負がして息を抜いたのは別段事柄を輕んじたわけでもなければ、案外な馬鹿々々しさから嘔んで吐き出したといふわけでもない。

つまり、この火の子は自分の身へのみ降りかゝるものと信じきつて構へてゐたのが、實は、わが身に降りかゝるのではない、といふことを知つて、個人的に一安心したといふことに止まり、事件そのものゝ性質の危険性が、それで解消したといふわけでは決してないことを認めると共に、一旦、

「なあ——んだ」

といつて、馬鹿々々しさうに力を抜いた米友が、再び別な用心を以て構へを立て直さないわけには行かなかつたのです、それといふのは被る人が誰であらうとも火の子は火の子です、火の子が自分の身の上へ落ちて來るのぢや無かつたといふことを認めて安心したのはいゝが、それが人の身の上なら落ちかゝつて來てもいゝといふ理窟にはならないのです、充分の危険性あるものは危険性あるものとしてなほ存在し、それが自分の頭を外れたとは云ひながら、他人の頭へなら落ちてはかまはないといふ論法にはならないのであります。



兩岸の竹槍の槍ぶすまは、米友を焦點とすることから明かに外れ出したけれども、その相手が消滅に歸したといふのではなく、手取り早く云へば、今度は、米友とその馬とを抜きにして、ひた／＼と竹槍同士の對抗の形となつて、ズリ／＼押しをはじめてゐる。

「なあ——んだ、こゝでも戦ごつこがはじまつてやがる」

と、米友が冷笑しました、道庵先生が、關ヶ原で演じた模擬戦を、こゝでも誰かゞ模倣してゐる。

面白くもねえ——

と米友がさげすみました、本來、米友は道庵がするやうな芝居氣たつぷりが餘り好きではないのです。紙幟を押し立て、模造大御所で納り返つて、あたら金錢と時間をつぶし、いゝ年をした奴が戦争ごつこをして見たところで、何が面白れえ——

子供ちやあるめえし——

と云つて、米友がさげすむのも無理はないのです、道庵先生は、本來、あゝいふことが好きに出来てるんだ、つまり病なんだ、病では死ぬ者さへあるんだから、どうも、あの

先生に限つて、仕方が無えと諦めてるんだが、病でも何でもねえ、いゝ年をした奴等が、斯う多勢寄り集まつて、あつちでもこつちでも戦争ごつこをするたあ、呆れ返つたものぢやねえか。

稼業を休んでさ——年に一度か二度のお祭なら仕方がねえが、見たところ、これは決してお祭ぢやねえんだ。

ちえッ——

米友は、冷笑しながら、それを見てゐると、事の體そのものは全く冗談でもなければいたづらでもない、好きでやつてゐるわけでも病で狂つてゐるわけでもない、まして、お祭騒ぎでなんぞあるべき餘裕や賑ひはちつとも見えないのみならず、明かに殺氣そのものが紛々濺々と湧いてゐるのです。

## 四

今や、最初に米友を眼ざして突き進んで來た兩岸の十數名は、それは先陣でありました



先陣は勇者中の勇者のすることです、米友を的としての槍先はこの時全く外れたが、槍と槍とが川原の眞中で出逢つたところで即ち白兵戦が演ぜられるのかと思ふとさうでなく、ある地點へ行くと、また急角度に槍先が變つて、今度は兩方の先陣共、川をさしはさんで並行線になつてまつしぐらに馳け登つて行くところを見ると、そこに水門口すいもんぐちがあります、一方は井堰いづき。

丁度、山崎やまざきの合戦あつせんで、羽柴軍はしはと明智軍あけちとが天王山を争うたやうに、この兩箇の先陣がその水門口を目掛けて我先にと競ひかゝる有様が米友にハッキリと讀めました。

「は、ア——水門だな」

今や、明らかに兩軍争奪の目的が、米友及びその馬であることは消滅すると共に、新たな目的物の存在がわかりました。

目的はあの「水門口」の奪ひ合ひだといふことは馬鹿でない米友の頭にかつきりとわかない筈はありません。

「よくある事だ！」

それは芝居氣たつぷりな摸擬戦もぎせんでもなければ、見得みえや慰みでやるお祭でもない、好きと病ひで、稼業を休んで、あゝしてゐるわけではない、全くの戦争だ、いや戦争以上の生活の戦ひだ。

水争ひみづあらしである——よくあることだ、ひでりの年には。

水を取ると取らないとは二つの村の收穫に關係するのである、一年の收穫は百姓の生活の全部に匹敵するのである、彼等兩岸の村々の者が、その收穫の爲に水を得ようとするのは、その生活の爲に生命を守らうとするのと同じことだ。

必要だ——道庵流の摸擬戦とは事が違つて現實に即した生死の争ひだ、笑ひごとや冗談ごとぢやねえぞ！

米友がさう悟つて來ると、おのづからまた力瘤ちぢりが満ちてぢだんだが川原の砂地へ喰ひ入りました。

こゝで今、生活の白兵戦が始まるのだ、さあ後陣ごせんが續く續く。なだれを打つて、後らから人數にんずが繰出して來たぞ。



やあ、こいつは——川原一ぱいが死人の山になるのだ、氣の毒だなあ——

どつちにも理窟はあるだらう、どつちも生死の境だから斯うなつたには違えねえが、何か捌きはつかねえものか、兩方共に生きたいが爲に水が欲しいんだ、それなのに、兩方に死人の山を築いたんでは何にもならねえではないか、意地を張るといふ奴は得てして斯んなもんだが——さあ、こいつはいけねえ。

おいら一人を目の敵にやつて來たなら、まだ始末はいゝが——この多勢が入亂れて混戦となつたら手はつけられねえ。

困つたなあ、弱つたなあ、ちえつ

米友は齒齧みをして、ぢり／＼して、眼をクリ／＼させてぢだんだを幾つも踏んで見ましたけれど、足がいよ／＼ぢり／＼と砂地の中に喰ひ入るばかりで、全く手のつけやうも足のばし／＼もないことを覺らずには居られません。

今や双方の先陣が、水門口の天王山を双方から取詰めて、竹槍の先が火花を散らして、兩岸に血の雨の洪水を切つて落さうとする、瞬間に、いつ、何處から、何時の間にも身を現

はしたのか、その天王山の中央の水門の上へ、すつくと身を現はした一つの人影を米友が認めました。

それは、米友が認めたばかりではありません、萬人ひとしく注意の焦點でありましたから、誰れ一人として、その一個の人影を認めないものはなかつたらうと思はれます、それのみならず認められるには、丁度都合のいゝやうに、地利もよかつたし、第一その人影そのものゝ風采が、かつきり、あたり近所を翻して居りました。

といふのは、その一つの物影だけが竹槍旗の兩岸の人民たちと違つて、鮮かにさむらひのいでたちの、しかも寛濶な着流しで、二本の大小を落差にしてゐた風采そのものが示します。

不意に現はれた、この一個の人影が、さしにも、いきり立つた竹槍組の先陣の氣勢をも大いに緩和したのか妨害したのか兎に角、決死的に勢込んだ先陣の槍先が鈍つたことは體かであります。

米友も、眼を拭つてそれをながめました、米友の立つてゐる地點からは、可なり離れて



あることですから、さながら人形芝居を遠見して居る如く、影繪の擴大を日中見せられてゐる如く見えるのですが、氣のせいか米友の眼で——遠目にどうもそこへ現はれたさむらひが、見たことのある——と云つても古い昔のことではない、最近に、さうく、長濱の湖邊で、釣を垂れてゐたあの浪人者——あれに似てゐるやうに思はれてなりません、どうも物云ひ恰好、それだ、それだとすれば、いつ、どうしてあそこへ駈けて來たのだらう、こつちの岸から駈けて行つたとも見えないし、あつちの岸から走りついたとも氣がつかかなかつたが——さては隠れてゐたな、あの水門の陰あたりに、びつたりと身をひそめてゐたのだな、うむ、さうだ、斯ういふ事が起るだらうとかねて心配してゐたものだから、その時の用心にと、あの水門の陰あたりに隠れてゐて、それから双方の仲裁にかゝらうといふ段取だ、成程、さうありさうなこつた。

この仲裁振りが見ものだなあ——米友はぢりくししながら片唾を呑みました。

## 五

併し、仲裁ぶりを見るといつたところで、こゝは遙かに隔つてゐるから、言語は無論聞えず、たゞ遠距離から活動寫眞を見てゐると同様で、彼等の動作だけがわかるのみであります、併し、動作だけにしてからが、銀幕の上に持廻りのすれからし物を見せられると違つて、白日の下にカツキリと實演によつて見せられるのだから、要領を得ることは手にとると同様です。

双方から勢ひ込んだ竹槍の先陣がこの水門口の處で浪人姿のさむらひに支へられました浪人姿のさむらひは、手振り、身まねを以て彼等に懇々と理解を解いてゐるらしい、その動作を見ると、言葉は無論聞えないけれど、可なり齒ぎれのよい辯舌家であるらしい。

或は叱り、或は教へ、或は和め、或は口説いてゐる様子は、活動俳優そのものと違つた眞剣味がありますから、自然、米友も身を入れて見てゐる事が出来るのであります、まして當面、その理解を聞き身ぶりを受けてゐる人數にとつては、なほ一層身に沁みる程度が深いと見えて、さしも意氣ごんだ竹槍の先陣達も、おのづから、いくらかづゝ意氣込が緩和されて行く氣分も、米友の方へ打つて響くやうにうつります。



そのうちに双方から續々と後陣が詰めかけて来る、先陣の氣勢によつて、それも皆幾分か殺氣が緩和されて來りつゝあるものゝやうです。

で、竹槍、鉞、鋤の類をはじめとしての獲物は、それぐ柳の木に立てかけられたり、土手の上に轉がされたりして、双方が素手で無事に入り交つて、と云つても中心に絶えずその理解を説いてゐる浪人姿のさむらひを置いて、各々の主張を口舌で取交しはじめてゐることもハッキリわかりました。

つまり、要領は斯うなんです、右の浪人姿のさむらひが現はれて、

「君達、さう一圖に獲物を持つて殺氣をたてゝはいかんぢやないか、水が切れたからと云つて、血の雨を降らすなんぞは愚な儀ぢや、ぢやによつて一應双方から委員を選んで評議をこらして見ちやどうだね、本来、責任は天にあるのぢや、天が雨を降らせてくれないのだから、恨みがあれば天へ持つて行くべき筋ぢや、喧嘩をするとすれば、天を相手に喧嘩をしなければならぬものを、それを人間同士がなすり合つて、血の雨を降らさうといふことはいかん、そこでぢや、この水門の水を穩やかに相談づくで適度に分配することにしち

やどうだ——たとへば、朝の何時までは甲の村で使用し、夕方の何時からは乙の村へ放流するといふやうな事にでも相談づくでやつて見ちやどうだ——幾ら君達が竹槍蓆旗で騒いで見たところで、この水量が一滴でも増加すべき筋合のものではない、そこで双方委員を選んで、お互に歩み合ひをいたし、相当限度まで辛棒すべき處は辛棒するといふ手段を執るのが賢い、さうして、その餘力を以つて、兩方の村々が仲よく相一致して雨乞踊でも催して天に祈り人を喜ばして見ちやどうだ、そのうちには何か效驗がないといふこともあるまい」

右のやうな理解を説いて聞かせてゐるとする、さうすると兩岸のいきり立つた、逸り男もそれに感化されて、

「成程、且那の仰有ることは尤もだ、お天道様が雨をふらせて下さらねえからといつて、人間が血を流すのは、よくねえ事だ、何とか總代を選んで、談合がぶてるものなら、そりやはお談合をぶつに越したこたあねえ」

といふやうな空氣に傾いたらしい、そこを右のさむらひが、



「では、ともかく總代は君達の方で各々五人なり十人なり、適當に選舉し給へ、仲裁役は不肖ながら拙者に任かせてもらへまいか」

といふ段取りになつて、異議なし／＼でそれから浪人姿のさむらひが、堤上をこなたの岸に向つてそろ／＼歩み出す、それを圍んで、双方の委員候補者達と見えるのが、ゾロゾロとついて来る、後ろにつゞく後陣の大勢も、斯うなつて見ると殺氣は解けたが、さうかと云つて、このまゝすんなりと解散する氣にはなれない、簡單に追ひ歸すわけには尙更行かない、そこで、さむらひを中心にした委員總代候補者連のあとをくつゝいて此の大多数がゾロ／＼と行くところまでは行かうといふ形勢になりました。

その形勢で見ると、今までは火花を散らさうとした二つの勢力が一つに合流はしたけれども、さてまた、この合流した勢の宛まるところが問題でなければなりません、一時の合流は見たけれど、それが爲に大雨が遽かに到つたといふわけでもなし、雙方を納得せしむべき解決條件が見出されたといふわけでも無いらしいから。

これからこの浪人に率ゐられて、何處かへ行くのだ、何處ぞへ行つて、改めて熟議を凝

すものに相違ないが、何處へ行くつもりだらう——そんなことまで、米友が想ひやつてゐるうちに、早くも右のさむらひを先頭にしてこの群衆の姿は全部村の中に隠れてしまひました。

そこで、川原の中に止まる者は、早や宇治山田の米友と、兩替の駄賃馬ばかり——それも、いつまで斯うしてゐなければならぬ筈のものではない、兎も角、市が榮えて見ると、自分達は、自分達としての引込をつけなければならぬ。

斯くて、米友は、徐ろに馬を曳いて、川原の中から、こちらの堤の上へ上つて假橋のある柳の大木のある處までやつて来たのであります、がそこで米友が、まづ目についたのはその柳の木の下に一つの立札があつて、これに筆太く記された字面を讀んで見ると、

「姉川古戰場」

は、あ、成程、この川が昔の合戦で有名な姉川か。

更にその立札に曰く、

元龜元年織田右府公淺井朝倉退治の時神祖御濟陣の處



は、あ、さうか、太閤記の講釋で聞いてゐる處だ、さすがの織田信長も、この時の戦は難儀だつたのだ、徳川家康の加勢で敗勢を轉じて大勝利を得たといふことは知つてゐる、朝倉の家來、眞柄十郎左衛門が途方もない大太刀を振り廻したなどといふ戰場が此處だ。米友がこの立札によつて、自分の歴史的知識を呼び起し、その心持でまた川原を見直すともう何だか今まで兩岸に騒いでゐた甲の村が織田徳川で、乙の村が淺井朝倉でもあつたやうな感じがする、たゞの山川として見るのと、歴史的知識を加へて見るのでは、米友としても何かしら觀念が一變するらしい。

だが、自分としてはわざ／＼古戰場見物に來たのではない、膽吹山の京極御殿へ歸らなければならぬのだ、これから膽吹へ行くには何も必らずしもさい前の處まで引返すものはあるまい、引返して見た處で、また悪氣流の中へ飛び戻るやうなものだから、この橋で、この川を渡つてつゞきつて行きさへすれば、膽吹へ出られるだらう、そこで、米友はもう一應馬のつけ荷を改めて、腹帯、草鞋を締めくくり、それにしても誰かに道案内を聞きてえものだと思案して立つことしばし、その背後からはボカ／＼とどかな音を立て

御同様駄馬が數頭やつて來るやうです。

よし、あいつに聞いてやらう——果して、ボカ／＼とやつて來たのは、五六頭だての駄馬でありました。

先頭に紙轡を押立て、一頭に二つづつ、大きな轡をくつゝけて都合六駄ばかり——それを馬子と附添がついて米友の前へ通りかゝりましたのを見かけて、米友が、

「膽吹山の京極殿の方へ行くには、この橋を渡つて行つても行けるだらうねえ」

米友がたづねても、この不思議な駄馬の一行は、つんと濟して返答もせず、氣取り込んで濟まして行く。

へんな奴だな、啞の行列ぢやあるめえか、米友が不審がつて、過ぎ行く駄馬の一行を後から見送ると、眞先に立つた駄馬の背に立てられた紙轡の文字が明かに讀めるやうになりました。

書きおろし、大根おろし

十三樽——



らつきやう一樽——

きやあぞう親分へ

斯うも讀まれるが何のことだか米友にはわからない。」

六

飛騨の高山の藝妓、和泉屋の福松は、宇津木兵馬の兩刀を、しつかりと兩袖で抱へこんで、泣きながら斯う云ひました。

「思、思、いやでございます、あなたばかりは逃げようとなすつても逃がすことではありません、少しは、わたしの身にもなつて考へてごらん下さいましな」

兵馬は長火鉢のこちらで、いかんとも致しやうがなく、福松の振舞をながめてゐるばかりです。

「わかつて居りますよ、あなたも此の高山の土地を離れようといふ思召で、それとなく御挨拶においでになつたのでせう、思召しは有難うございますけれど、わたしの身にもなつ

て……ごらん……下さいましな」

斯様な手は、斯様な女にはよくあり勝ちの手でありますけれども、有り勝ちの手にしてからが、今日のは、此の女の用ひ方に、少し當りが違ひ過ぎ薬が強過ぎるやうな處があります。涙を惜げもなく、ほろ／＼とこぼして泣きわめきながら、武士の腰のもの二つを鋸で引いても放さないやうな意氣込みでしつかりと抱へ込んで、

「本當に……わたしの……わたしの身にもなつてごらん下さいましな」

と、こゝで、また繰り返し言を云うて泣きじやくりながら、

「新お代官の御前があんなことになつたのは、わたしから見れば、自業自得ですわ、大きな聲ぢや云はれませんかいい氣味ですわ、あんな奴、あんなのがいゝ見せしめで、内心、溜飲が下がるやうに思つたのは、わたしばかりぢやございません——ですけれど、あの飛ばつちりを浴びたものゝ身になつて御覽なさいまし、やりきれたものぢやありません、その中でもこのわたしなんぞは……」

こゝでまた泣き落し、それは、ちよつと文字ではうつし難い、獻敬流涕といふ文字だけ



でも、名状し難いすゝり泣きと昂奮とで。

三三

「お役所へお呼出しを食つたり、お茶屋さんでお取調べを受けたり——何か、わたし風情があの一件に黒ん坊でもつとめてゐるかなんぞのやうに痛くない腹を探られるので、全くやりきれません——それはお代官の御前の有難い思召を承るには承はりましたけれどもあんまり有難過ぎますから、御免蒙つちまつたばかりなんでせう——あの一件についてやあ何も知らないわ、全く知らないものを、朝から晩まで根掘り葉掘りお取調べをうけてまだ、なか／＼御用済みにならないばかりぢやなく、かんじんの、わたしよりも一件に近い人は皆んな姿を隠してしまつたものですからわたしだけが、人身御供のやうになつて動きが取れないぢやありませんか、そんなわけで——そんなわけですからお客様も、けんのがつて、お座敷もめつきり減つてしまひました、それは災難と思つて諦めませうけれど……」

ここで、福松が思ひ追つて、おい／＼と手離して泣きました、無論、兩袖でしつかりと宇津木兵馬の雙刀を抱へ込んでゐる以上は手離しでなければ泣けないわけなんです、そ

れにしても、あんまりあけすけな泣き方で、却つて興がさめるほどです、興がさめるほど露骨に泣いてゐるのですから、それだけまた、思はせ振りのたつぷりな手れん手くだといふやうなものが少ない、つまり、その泣方は藝者や遊女としての泣き方ではなく、子供の歌々をこねる泣きつ振りと同じやうなものでした、色氣のない泣き方であるだけ、それだけ、兵馬をしていよ／＼迷惑がらせてゐると、

「あなたまでが、わたしを袖にして、寄りついて下さらないことが悲しうございます、寄りついて下さらないばかりか、あなたまでがわたしを置き去りにして逃げてしまはうとなさる、あんまり薄情なあんまり御卓怯な、あんまり情けなくて、わたしは……」

と、福松が、また、わあ／＼とばかりに泣き落しました、兵馬も全くあしらひ兼ねてゐるものゝ、いつまでも黙つてもゐられないので、

「さういふわけではない、何も拙者が君を捨て、此の地を立たうと云ふわけもなし、また君にしてからが、拙者に捨てられたからと云つてさ様に泣き悲しむ筋もあるまい——拙者には君の感情の昂ぶつてゐる理由がわからないのだ」

三三



「そりや、おわかりにならないでせう、あなた様なんぞは、立派な男一匹でゐらつしやるから、今日は信濃の有明、あすは飛騨の高山、何處へなり思ひ立つた處へ思ひ立つた時にいらつしやる分には、誰れに御遠慮もございませぬけれども、わたしなんぞは……わたしなんかは……さうは参りませぬ……」

「拙者として酔興で他國を流浪してゐるわけではない、行くもとどまるも、それは、各々、生れついた身の運不運で、如何とも致し難い」

「如何とも致し難いで済ましてゐらつしやられるのが羨ましくございませぬわ、少しはわたしたちの身にもなつて御覽下さいませぬ」

福松はこゝでまた、さめぐと泣きました。

兵馬は挨拶をつよくべき言葉を見出すに苦しんでゐると、

「胡桃澤の御前があんなにおなりになると、お關さんといふ人はどうでせう——足もとの明るうちに眞先に逃げてしまひました、抜目はありません、恐れ入つたものですね、全くあの人には——あの人なんぞこそ、うんと責めてお調べになれば、きつと何かしら立

派な種が擧がるに違ひありませんわ、何も、あの、お關さんが、糸を引いてあんな大事を持ち上げたとは云ひませんが、あの人を除いては此の事件の手がよりはつきませぬね」

「うむ」

「わたしは、お關さんに泥を吐かして見さへすれば、今度のことだつて、あらましの筋はわかるに定まつてゐると思はれてよ、ところがどうでせう、悞口ぢやありませんか、どの道事面倒と見たから、あの方は、その晩のうちに、この土地をすつぽかしてしまひました天性、悞口な人は、どこまでも悞口に出来てゐますのねえ、抜け目のない人は、一から十まで抜目がありませんのね、それに比べると、わたしなんぞは、わたしなんぞは全く、この世の馬鹿の骨頂でございますよ」

と云つて、藝者の福松は泣きじやくりながら、ちよつと見えをきるやうに面を上げて兵馬を斜に見ました。

「ふ——む」

「ふんぎりもつかず、引つこみもつかずにうろ／＼してゐるもんですから、何の事はない



お關さんの投げた株を引受けて、追敷おひきを食くはされ通し……全くいゝ面の皮かですわ」

「それを繰返すのは愚痴だ、自分で今云つてゐる通り、災難と諦めて、何も、こつちに疚いしいことさへなければ素直すなはに幾度でもお呼出しを受けるがよい、訊ねられたらば知つてゐる通りを洗ひざらひ返答してしまひ、知らない事は知らないと正直に通せばいゝのだ」

「さうおつしやられると、それまでいゝございませうけれどもね、これでも人間にんげんの端はたくれでございませうから、苦しいと思ふこともあれば、癢かゆに觸ふることもありますのさ、わたしもお關さんのやうに、自由が利く身でありさへすれば、こんな處に斯うして馬鹿々々しい祟り目の間屋を引受けてなんぞゐるものですか——どうにも斯うにも動きの取れない、わたしといふ者の身の上を少しはお察さつし下さいませ」

「それは、人の運うん不運ふんで、やむを得ない事だと云つてゐるのに」

「運、不運なんて云ひますけれど、それは大てい意氣地なしの云ふ事ですわ——しつかりした人は、自分で自分の運を切開いてしまひますからね、不運のものも運のいゝやうに返してしまひますからね、早い話がお關さん——」

この女はよく／＼お關さんの身の上が羨ましいものと見える、さうでなければ、よく憎らしいものと見えて、一口上げにお關さんが引き合ひに出て来る。

「お關さんなんか、運不運だなんておとなしくあきらめて、この土地にぶらついてゐてごらん下さい——今頃はどんなことになつてゐるかわかつたものぢやありません、それを知つてゐるから、あゝして抜目なく逃げてしまひました、残されたわたし達こそ全くいゝ面の皮、お關さんの分まですつかり被かつて申譯をしなければなりません、お關さんさへおいでなされば、わたしなんぞこの度の事件についてちや物の數には入らないのですが——お關さんの分をわたしが被つてしまつて、日日毎日……本當に、お關さんといふ人は、今頃は誰とどうしてどういふ見で何處の土地を遊び歩いておいでなさることやら、憎らしい！」

福松は齒がみをして後れ毛をキリ、と噛みきりました、これは當面の兵馬に向けて怨言を云ひ立てゝゐるのだから、自分よりこの事件に一層直接な當人でありながら、逸早く、この土地を身抜けをして、その飛ばつちりを、すつかり自分に背負はせて行つてしまつた處のお關さんなる者に向けて恨みを述べてゐるのだからわからない。」



「ほんとに憎らしいのは、あの人よ、お代官の生きてゐる間には、腕に燃りをかけて散々たらしこんでさ、災難の時は自分だけいゝ子になつて後白浪——わたしなんぞは商賣の癖に腕もないし智慧もないし、それにまた、憎いのは、あのがんだりきといふ兄さんよ——なあに兄さんなことがあるものが、あのおつちよこちよいのキザな野郎、あいつも憎らしいつたらありやしない……」

・今度はまた、全く別な方角へ飛び火がして來たらしいが、兵馬は、いかんともその火の手の烈しさに手がつけられない。」

## 七

和泉屋の福松は、がんだりきと云ひ出して又躍起となり、

「ほんとに、忌な奴たらありやしない、三千世界の色男の元締はこちらでございつてな面をして、手んぼうの癖に見るもの聞くものに、ちよつかいを出したがるんだから、始末が悪いことこの上なし、さうして、御當人のおのろけによると、そのちよつかいといふち

よつかいが、十のものが十までもものになるんださうだから、やりきれない、キザな奴、忌な奴——」

福松どのは、がんだりきのことを、囁んで吐き出すやうに、云ひだしたけれども、相手が宇津木兵馬だから、あんまり手答へがないのです。

兵馬でなからうものなら、はゝあ、さうかね、さう云つた色男の本家がこの邊へお出ましになつたものと見えますな、ところで、その御當家には格別の御被害もございませんでしたかね、そのちよつかい、とやらの味はいかゞなものでございましたかね、抑うつて見たいところだらうけれども、相手が兵馬だから、そむな輕薄な口を叩くわけには行かないのです、手答へが無いだけ張合ひも無いと云へば云へるかも知れないが、相手がまたおとなしいだけに、こちらも亦思ふ存分云つてのけられる自由があると見えて、福松どのは、かさにかゝりました。

「ほんとに忌な奴、キザな奴、あの位忌な奴も無いものですけれども、でも割合に度胸があるんですよ、お賽の切れつばなれもいゝ方でしてね、やつぱり男はね……」



おやく／＼また風向きが變つて來たぞ、兵馬が黙つて聞いてゐると、

四〇

「色男てものには、お金と力は無いものと昔から相場が決まつてゐるのに、あのイヤな奴、妙に色男ぶる癖に、あれで度胸があつて、切れつばなれがよくつて、で、口前がなか／＼うまいものだから——口惜いわ、わたし、どうも、とうからお關さんと出來てゐるんだと睨んでゐるのよ、相手がお關さんだからたまりませんわね、あの男前と……口前ぢやたまりませんよ——」

福松どの、悲泣がいつしか憤激となつて最初は口でけなしてゐたが、なりきなるやくざ野郎を、結局、度胸があつて、お金の切れつばなれがよくつて、口前がいゝ、色男の正味を肯定するやうな口振になつてしまふと、今度は鋒先がお關さんなるもゝ方に向つて、頻りにそのお關さんをくやしがるものですから、兵馬も自然過ぐる夜の事を思ひ起さないわけには行きません。

つぶし島田に赤い手柄の、こつてりした作りで、あの女から夜中に襲はれた生々とい體験を持つ宇津木兵馬はその時の事を思ひ出すとゾツとしてしまひました、あの時、

「ねえ、宇津木様、うちの親玉にも大てい呆れるぢやありませんか、きのふ市場でもつてちよつと遊皮のむけた木地師の娘なんかを擲出してしまつたんですとさ、さうして、今晚から母屋の方で一生懸命口説き落しにかゝつてゐるんださうですよ、ですから此方なんぞは當分の間御用なしさ、見限られたもんですね」

それから、自分の枕許に、だらしない姿で立膝をしながら、若いのは若い同士がいいか、また若いの同士では、食ひ足りないから、油ぎつた大年増を食べて見る氣になつたりするのぢやないか、穀屋のイヤなをばさんがどうの、男妾の淺公がどうのと、口説きたてたあの厚かましさを。

處でその前の晩、戸惑ひをして自分の寢間へ紛れこんだ怪しい奴がある、あれが、どうも、このいけ圖々しい大年増を覗つて來て、戸惑ひをしたものとしか受取れない。

「いかにも、そのがんりきとやら云ふならず者が怪しい！」

「怪しいにも何にも……」福松は一層聲を立て、

「ほんとうに、あのお關のあまのがんりきの奴、今頃は、もう疾うに國越しをしてしまつ



て、とまりくの旅館で、いゝ加減うだりながら——鶏が鳴くあづまの方へ行つたか、奈良のはたごや三輪の茶屋なんかと洒落のめしてゐるかわたしやそんな處までは知らないけれど、残されたこつちこそ、いゝ面の皮さ」

この女相當の八ッ當りを、兵馬にまともに向けるから、それは上の空に聞き流して、自分は自分としての、この頃の身邊雑事をあれかこれかと空想に耽つてゐる時、外で夜廻りの音を聞きました。

夜廻りの拍子木の音を聞くと、兵馬は膝を立て直し、

「それはさうと、もう時刻も遅い、お暇します、冗談はさて置いてそれをお返し下さい」

眞剣そのもので、福松が最前から後生大事に抱へ込んでゐる兩刀を指して促がすと、福松どのは、一層深く抱へ込んで、頭を振り、

「いけません」

「冗談もいゝ加減に下さい」

「冗談ではございません——わたしは眞剣に申上げてゐるんでございますよ」

「では、どうしようといふんだ」

「今晚はあなたをお歸し申しません」

「歸さないというて、こゝは拙者の泊まる處ではない」

「はい、あなた方のお泊りになる處ではございません、あなた様には本當にお羨ましいお宅がおありでゐらしゃいます、でもたまには宜しいぢやございませんか、今晚はおいやでもこちらへお泊り遊ばせな」

「何を云つてるのだ」

「あなたも随分罪なお方ねえ」

「たは言を云はず、穢やかに云つてゐる間に返すものをお返し下さい」

「ねえ、宇津木様、わたし今晚は大へんしつこいでせう、わたしだつて張店のをばさん見たやうにこんなしつこい眞似はしたくはないんですけれど、さうして上げなければあなたのお爲めにならない譯があるんですから、かうしてあげるのよ、今晚は泊つていらしゃい」



「滅相な」

「あなたはそんな生まじめなお面で、うぶなお容子をなさいますけれど、本當の處は、どうして随分な罪作り——残らずこつちには種があがつてゐますから、それを白狀なさらなければ返して上げません」

「何か、拙者が後ろ暗いことでもして居ると申されるのか」

「え、さうでございますとも、あなたといふ人こそ本當に見かけによらない、イヤな人です、憎らしいお方、もうすつかり種が上つてゐますから隠したつてだめよ」

「そちらに種が上がつてゐるのなら、何も改めて拙者にたづねるには及ぶまい——どれ」  
兵馬は、苛立つて、もう、斯うなる上は、手ごめにしても刀を奪ひ取つて差して歸るまでの事だ——と立ちかけた時、

「あ、痛ッ」

と不覺の叫びを立てたのは相手の女ではなくて却つて自分でした。  
「憎らしい」

女は今まで兩の袂で後生大事に抱きかゝへこんでゐた兵馬の兩刀を、左の片袖だけで押へ換へて、さうして、右の片手をのべると、いきなり、苛だつて立ちかけてゐた兵馬の左の股のところを——イヤといふほど——つねりました、武術鍛練の兵馬が、もろくも此の不意打を食つて、

「ア、痛ッ」

「憎らしい」

今晚のこの女は、憎らしい——と、口惜しい——との連發です。

思ふさま、不意打を食はして、兵馬を痛がらせた福松は、こゝで、やゝ勝ち誇つた氣位を取返し、

「それ、御覽なさい」

何がそれ御覽なさいだか、兵馬には一向わかないのを、福松どのは疊みかけて、

「痛かつたでせう——わが身をつねつて人の痛さといふのが、それなんですからよく覺えてゐらつしやい、あなたといふ人も、この頃は相應院の離れ座敷で、お安くない世話場を見



せてみらつしやるんですつてね、相手はお雪ちゃんといつて——知つてみますよ、知つて  
 るますよ、いゝえ、お隠しになつても、もう駄目です、そのお雪ちゃんといふ可愛ゆい子  
 を、あの助平のお代官の手から、助けたり、助けられたりがもとで、お二人が水入らず、  
 近いうちに御兩人がまた手に手をとつて道行といふ筋書まで、ちやんと、わたしには讀め  
 て居りますのよ——憎らしい！口惜しい！覚えてみらつしやい！」

また刀を一方の袖だけに持たせて、右の手をさしのべて——それは以前よりも一層手強  
 く兵馬の股を掴み上げてやる氣で出した手を、今度は兵馬も容易くさうはさせません。  
 「何をなさる」

と云つて、その手をぐつと抑へたが、思ひの外に軟かな手ざはりなのに、抑へた兵馬の  
 方が却つてギョツとしました。

## 八

生まじめな宇津木兵馬は、そこで、福松の爲に自分とお雪ちゃんとの間が、決してそん

なわけのものでないことを説明しました。

それから、お雪ちゃんの立場の氣の毒であることをよく話して聞かせ、しかもこのお雪  
 ちゃんも、つい數日前に自分には何とも告げずに行方不明になつてしまつたことによつて、  
 自分の心配が一層加はつてゐることを、細かに話して聞かせると、最初から焼け氣味  
 で聞いてゐた福松が、だん／＼釣り込まれて、お雪ちゃんの爲に同情を表すると共に兵馬  
 にとつて好意を持ち——はじめから悪意なんぞは持つてゐなかつたのですが、少くともそ  
 の不眞面目な、からかひ氣分を投げ捨て、しまひました。

そこで、質に取つた兩刀も無事に返して貰ひ、この遅くなつて歸るといふ兵馬をも引止  
 めないで、素直に送り出してくれたのです。

斯くて兵馬は無事に相應院へと歸つて來ました、そこで燈火をかゝげて、冷えたお茶漬  
 をさら／＼と掻き込んでしまつたが、そのまゝ床をのべて休む氣にもならないで、何やら  
 取つかれたものゝやうに、暗を前にしてぼんやりと考へ込んでゐるのです。

お雪ちゃんに行かれた物淋しさ——のみではありません、今晚は何となく何かを取り落



して来たやうな氣持がしてなりません。

ホツと息をついて、眼の前の松の金屏風をちつと眺めてゐましたが、鶏とが鳴く聲に驚かされて、さてと立ち上つて、寢具をのべて——それは以前、机籠之助が隠れてゐて、可哀さうな貸本屋の政公を手ごめにした一間なのです。

そこで手早く衣類を改めて枕について、まだ眠りもやらでゐる時分のことでした、外で、  
「もし」

これには兵馬も聞き耳を立てないわけにはゆきません。

一旦、枕へつけた頭もろ共に、半身を持ち上げてゐると、

「もし」

戸外そとでするのは女の聲。

もし、兵馬が籠之助であつたならば、これは當然政公が甦よみがつて恨みに来たものと聞いたでせう、或はまた兵馬が神尾主膳であるならば、藤原の幸内が迷つて出たと思ふより外はないやうな突然の聲でしたけれど、物の怨靈の恨みを受ける覚えのない兵馬は、その現實の

聲に耳をすますと、

「宇津木様、こゝ開けて頂戴な」

矢張りお雪ちやんではなかつたのです。」

「福松ではないか」

「はい——早くさ、早く開けて頂戴よ」

兵馬は全く機先きさきを制せられてしまひ、開けるも開けないもなく、もう起き上つてしまつて、やえんに手がかゝると、雨戸がからりと開きました。」

「何しに來たのだ」

「御免なさいね、宇津木さん」

女といふものは、どうして、どれもこれも斯う圖々しいものだらう、もう座敷へ上つてしまひました。

「どうしたのです」

「わかつてるぢやありませんか、逃げて來たんだわ」



「どうして」

「どうしていもありません、あなたのおあとを慕つて参りましたのよ」

「ちえッ、輕はづみのことをしたもんだな」

「輕はづみなことがあるのですか——わたしは、あなたを頼るのが一番たしかだとつくづく思案を重ねた上の覺悟なんですから」

こゝで、また宵のこととは異つた場面で二人は相對座しなければならなくなりました。

「もう致方がございません、もし、あなた様が、御迷惑とおつしやるなら、わたしは死ぬばかりでございます、かうしてこのまゝ此の土地にゐつかれるものか、どうか、少しは、わたしの身にもなつて御覽なさいましな、それは何も悪い事さへしてゐなければ、いくらお取調べを受けても何ともない筈と仰有いますけれど、人氣商賣のわたし達は、もうこれだけで、商賣は上つたりなんです、それだけなら、まだ宜うござんすけれど、本當の罪人が出なければ、渡り者のわたしなんぞが、差しむき一番いゝ人身御供なんぞでせう、ですから、お役人のお手心によつて、いつ、どういふ目に逢はされるかわからないぢやありませんか、それは、さういふ無茶なことではない、むじつ者を捕へて罪に落すなんぞといふことは、いくらお役目とはいへ、さう滅多にやれることではないとおつしやるかも知れませんが、それは、世間の明るい時節なら知らぬこと、この飛驒の國の奥で——お代官のお政道向の評判のよくない處で通用する筋道ではございません、あなたのやうなお方がまだお一人でも此の土地に残つておゐるのうちには宜しうござんすけれど、さうでなければ、わたしなんぞはいゝやうにさいなまれてしまひます、ですから、同じことならお關さんのやうにはしつこくは参りませんけれど、足許の明るいうちに逃げて見ようといふ氣になつたのが無理でございますか」

「そんなら、これから何處へどう逃げようといふのだ」

「それだけは、わたし、もう、この頃中から考へて置きました、表通りはいけません、お關さんのやうに、要領よくやつてしまへば格別ですが、今となつては、表から美濃や尾張へ逃げ出さうとするのは、網に引かゝりに行くやうなものでございますから、これから北國へ逃げるのが一番ですわ、それには白山行者の眞似をして、加賀の白山へ逃げるつもり



なのよ、それが一番かしこい仕方だと思つてよ、さうして、わたし、ちやあんと、その道筋を、自分で繪圖にかいてこの通り持つて居りますのよ」

と云つて、女は懷中から、一枚の繪圖を取り出して、臆面もなく兵馬の前にひろげました、成程、此の女自身が、人にひめて、手掛けたものと見えて、繪もなつてゐないし、文字のまづい事、一目でわかるけれども、この際、恥しがつたり恥しがられたりしてゐる場合ではないと見え、兵馬は燈を引き寄せて、光を、その圖面の上に落しました、さうすると女がいふ。

「加賀の白山様へはわたくしも、生のあるうちに一度は御參詣をして置きたいと思ひました、御一緒に参りませうよ」

危険區域を脱出したい心境が、早くも白山參詣の心願とごつちやになつてしまつてゐる。

兵馬は何とも答へないで、その女の描いた不器用な繪圖とまづい字面を、じつとながめてゐる——さうして可なりながい時間の間兵馬が沈黙してゐるものだから、

「あなた、何を考へてゐらつしやるのよう」

と云つて女が嫣然笑つて、兵馬の膝をグリ／＼と突きました。

さき程つねられた時よりも痛くはないが、兵馬はまたぞつとして、それを振拂はうとした手先きが、女の手に触れるとそのさはり心が以前の時よりも軟らかさを感じました、圖々しい女は、兵馬の膝に置いた手を引かうともしないのみか、兵馬の手を握り返しながら、

「よう、あなた、何を考へてゐらつしやるの——物事は成るやうにしか成りやしませんからクヨ／＼なさないやうに……一體、あなたが薄情でさうして小臍であらつしやる事は中房のお湯で、よう／＼、わかり過ぎるほどわかつて居るのよ、けれど、それがまた、あなたはお忌でも、斯うして、飛驒の奥山で退引ならずお目にかゝらなければならぬやうになつたのも淺からぬ御縁といふものぢやなくつて——淺間の温泉では、随分、失禮しちやいましたわね、でも、どうも、あの時から、あなたとわたしとは、離れられない御縁——といふわけぢやなかつたのか知ら、ですから、あとになり、先になり、お互ひに斯うしてよれつ、もつれつして行くのが乙ぢやなくつて、考へて見るとお互は前世でいゝ仲を裂かれた許婚同士か何かの生れ代りぢやないか知ら、ですから、あなたがお忌でも、わたしが



好きの嫌ひのなんのといふ心持でないにしても、二人は、行く處まで行かなけりや納まらないやうに出来てゐるのかも知れませんがねえ、行きませうよ、お關さんがんりきの奴は、いゝ氣で美濃路へ出てしまひましたし、お雪ちゃんといふ方は、お化けのやうなお坊さんとこれも表の方へ出て行つたといふぢやありませんか、あんな人達への意地としてもわたし達は、同じ道をとりますまい——白山へ行きませうよ、加賀の白山へ——白山はい處ですつてね、あなたも、いゝ御縁ですから、ぜひ、一度參詣してゐらつしやい、ですけども、今度は途中で振り捨て、あの佛頂寺なんて佛頂面のさむらひにさらはせてしまつてはいやよ——ねえ、あなた行きませうよ、北國筋へ、旅は嬉しいものぢやなくつて」女は引つゞき兵馬の膝をグリ／＼と突きました。

## 九

それから、三日市から二本木の間の小鳥峠といふ處の振り分けで、ホット一息ついた二人の旅人を見たのは宵天白日の眞晝時の事でありました。

「この邊で、ゆつくり一休みしてまゐりませうよ、ねえ、宇津木さん」  
後から、のたりついた女の旅姿が、甘つたるい聲で呼びながら、ハツハと息をきりますと、前に立つてゆつくりと歩みを運んでゐた若い武士の旅姿が、頷いたまゝ無言でそこに立つて待つてゐます。

「あゝ、せつない、負けない氣で一生懸命に歩いて、やつぱりあなたにはかなはないわ」と云つて、女は秋草の老いた峠路の草原の中に、どうと腰を卸してしまひますと、先に立つて待つてゐた若さむらひは、無言で、その老いたる秋草の中に立つ一基の石ぶみの面に向つて、瞳を凝したまゝです。

「何を見詰めてゐらつしやるの」

「いや——この石ぶみに何か文字がある、それを……」

「何と書いてございますか」

「さ様——淋しさや何が鳴いても閉古鳥」

「ほんとに、淋しい道でございますね、誰も人が通りませんわねえ」



「さうです、この道は、加賀へ抜ける本道ではあるけれど、表通りの信濃、美濃方面へ出る道と違って淋しいです」

「淋しいのがようござんすよ、いつそ加賀の白山まで、二人つきり人目にかゝらない旅がして見たいわ」

「さうも行くまいよ」

「何だか、あたし、後から、追手がかゝるやうにばつかり思はれてなりませんの、大丈夫でございませうね、宇津木さん」

「大丈夫だ——その點は心配しなざるな」

「でも何だか——あなた、中房の時の事が思ひ出されてならないわ、あなたあの時の事をお忘れぢやないこと」

「忘れやせぬ」

「あの時の、あなたのまあ、冷淡なこと、何てつれない道づれでせう、わたしまだ恨み足りないことよ」

「うむ」

「佛頂寺なんかといふ、あんなおさむらひにわたしを浚はせて、あなたは狸をきめてゐらつしやる、あなたこそいゝ厄介ばらひをして清々したでせうが、あれからわたしの身が、どういふ風に取扱はれたか御存知？」

「知らない——たゞ、君と又しても高山で對面したことが不思議な御縁と思つてゐるばかりだ」

「御縁のはじまりはもう少し前に遡るのね、そもくあの松本の淺間のお祭禮の晩——あの時こそ、本當に失禮しちやいましたわ」

「うむ」

「でも、あなたといふ方は、本性はやつぱり親切なお方なのね、中房のお湯屋のお蒲團のお城の中に圍まはれてゐるわたしを、わざく探し當てゝ下さいました」

「あれは、君をたづねる爲ぢやない、別にたづねる人があつて、それが偶然に……」

「偶然にでも何んでも宜しうございますよ、あんな山奥の宿の中に蒲團蒸しにあつてゐる



わたしを、わざくのやうに訪ねて下さつたのは、やつぱり盡きせぬ御縁のうちなのだわねえ」

「うむ」

「まあ、あなたも、こゝへお坐りなさいましたな、前に日限のある旅ではなし、あとから追手のかゝる旅でもないぢやありませんか」

「併し、日のあるうちに、ゆつくり夏廐の宿まで着かなければならん、敢て急ぐには及ばないが、さう緩漫にばかりもして居られぬわい」

「わたしの爲なら、かまはない事よ、こゝで斯うしてあなたとお話をしてゐる間に、日が暮れてしまひませうとも、夜が明けませうとも、わたしはかまひませんのよ」

「夜露に當ると毒だからな」

「まあ、あなた、今からわたしの爲に夜露の心配までして下さるのね、いつそ、その夜露にぬれて見たいわ」

「兎も角、そろく出かけようではないか」

「ねえ、宇津木さん」

「何だ」

「誰も、人は來やしませんか」

「誰も來やせぬ」

「高山の方から待てといつて追手のかゝるやうな心配はございませんのね」

「それは絶対にない——」

と兵馬はきつぱり云ひ切つて、越し方の飛驒の高山の方をそつと見返りましたが、なほ、女の爲に安心せしむる言葉をつけ足して、

「君は加州金澤の知邊の處へ身を落つける、拙者は途中相當の地點まで君を送つて、それから白山に登る——といふことで、高山の役向の了解を得た上に、手形切手の事も落ちなく取計つて來てゐるから、松本の時とも違ひ、中房の時とも違つて、この通り、青天白日の下を大手を振つて歩けるやうにして出て來てゐるのだから、その點は更に心配することはないのだ」



「ほんとに、斯うも晴々しく旅立の出来るのは、わたし、生れて初めてなのよ、今までした旅といふ旅は、皆んな追はれて逃げるやうな旅ばかりでしたのにけふといふ今日は斯うして明るい日に、晴れてあなたと——水入らず、何だか恥かしいやうな、勿體ないやうな、安心したやうな、追はれてゐるやうな、變な氣持——でも、わたし、こんな嬉しい旅は今までにした覚えがありません、これといふのも皆んな、あなたのお面、あなたがお役所向きをすつかりよくして下すつたから……まあ、そんなに、いつまでも、あなた、そつけなく、突立つてゐらつしやらないでも宜しいぢやございませんか、こゝへお坐りなさいましな」

「うむ」

「本當の事はねえ、宇津木さん、わたし、もう此の上は一寸も歩けないのよ」

「どうして」

「どうしてたつて、あなた……少しは同情して頂戴な、足弱のわたしにばつかり重い物を持たせて」

「君に別段、重たい物を持たせたつもりは無いが……」

「有りますわよ、わたしも意地ですから、こゝまで一生懸命に持つて來ましたけれど、もう意地にも我慢にも持ちきれませんから、こゝいらで、あなたに肩代りをしていただけたいと思ひます」

「何だ、それは」

「まあ、お坐り下さいまし、これをあなたに持たせて上げなければ……」

と云つて、女は着てゐた旅姿の上着をかゝげはじめ、前の襟をグツと押しひろげ、さうして下腹の方へ頻りに手を入れてはたくしあげてゐるのを、兵馬は見えない振りをしてゐると、やがて女は友禪模様の縮緬の胸巻をするくと自分の肌から引き出して、それを草原に置きました。

「ねえ、宇津木さん」

「何です」

「これを御覽下さいまし、たゞ御覽下さるだけぢやいけないのよ、こゝまでは、わたしが



持つて來ましたけれど、これからはあなたに持たせて上げなけりや、わたしがやりきれません」

と云つて、女は、その胴巻を、また取り直すと見ると、成ほどずしりとかなりな重味です、は、あ、金だな、金として見ると相當な大金だ、この女、商賣柄に似合はず心がけがよい、今日まで稼きたため、この際、最も有効に持ち出したものだらう——と、兵馬が横目に見てみると、女はその胴巻を無雑作に吊上げて、蛇の腹をでも逆さにしごくやうに持ち上げると、スル／＼と中から重みのあるものが、花野原に向つて吐き出されました。「宇津木様——これから、このお寶をそつくりあなたにお引継ぎいたしますから、宜しいやうに」

「は、あ、大金のやうだな」

「え、わたし達としては、大金なんでございますが」

「一體、いくらあるのです」

「三百兩ございませう、そつくり小判で」

「三百兩——」

といつて、兵馬が實は内心大いに驚きました、最初から不相應な重味とは見てゐたのだが、小判で耳をそろへての三百兩の包み、これは斷じてこの女の稼きためた代物ではない、さうかといつて旅から旅を賣られて歩くこの女が、始終心がけてこの三百兩を肌身につけて放さないといふことは、有り得べきことではない、恥かしながら自分としても、まだ三百兩といふ耳の揃つた金を手に取つた覚えはない——これがあの有野村の暴女王の懐か、らでも出たことだとさして不思議とするに足りないが、この女からこゝで斯うして投げ出されて見ると、兵馬は無言でこれをながめ去るわけには行かないでゐる先をきつて、

「あなた、吃驚してゐらっしゃるわね、びつくりなさるのも御無理はございませんが、御安心下さいまし、性の知れたお金でございますから」

「どうして、君が、そんな大金を持つて出て來たのだ、それほどの金を持つてゐたなら、出立の前に、拙者にそれと打ち明けて呉れた方がよかつたのに」

「あの時にこれを打ち明けようものなら、物堅いあなたの事ですから、元へ返せの何のと



文句を有仰るにちがひないから、退引ならないやうに、こゝまでわたしが重たい思ひをして持つて來ました、もう、あなた、へたな熊谷のやうに戻せの返せのおつしやつても駄目です、わたしの心意氣で、あなたに貢ぐお金なのですから、お受けにならないければ男が立たないつて事になるのよ」

「一體、君はどうしてこれだけの金を持つてゐるのだ、不相應の金だ、君にとつても不相應だし、拙者にとつて不相應だ——これは何處からどうして出た金だ、その出處がわからぬ間は、拙者として、めつたに手に觸れるわけにはならん」

「さう、お出でなさるだらうと思つてゐましたわ、それは、わたしが持つて來たからと云つて、わたしのお金でないことはわかりきつてゐますわねえ、わたし風情で、これだけのお金をふだん斯うして肌身につけてゐられるくらゐなら、こんな稼業をして居りません、これはお他人様のお寶なのよ、でも、御安心下さいまし、お他人様のお寶には違ひありませんけれども、それは、云はゞわたし達に授かりものなんですから、二人で思ふやうに使つてしまつてかまはないたちのお金なんだから……そこでおわたしのはあなたのお宝、あなた

たの物はわたしの物といふ寸法になるのよ、嬉しなくなつて」

「何だか、君のいふことは論理がようわからん——苟くも自分の所有に屬せざるものを無斷で勝手に使用して差支へないといふ事はいづれの時、いづれの國の掟にもない」

「處が、あなた、この國の今日の場合には丁度、誂へ向きにさういふ掟が出来てゐるのですから、豪勢でせう——そんな事はどうでもいゝわ、手つとり早く、打ち明けてしまひませう、實はねえ、宇津木さん、このお寶は、例のそら——お關さんのお金なんですよ」

「お關どのゝ？」

「え、え、お關さんのうちにあつたのを、がんりきの奴がそつくりわたしの處へ持つて來て、預けつ放なし、それなのよ」

「はゝあ——」

「ですから、いゝでせう、丁度、わたし達にお使ひなさいつて天道様が授けて下さつたものなのよ、わたし達が使つてあげる方が、あのお關さんやがんりきの奴に使はせるより、ぐつと功德になる、またさうでもしてやらなけりや、わたしの糺の虫が承知しない」



「は、あ——」

と、兵馬はこゝで、ちよつと考へさせられました。

## 十

これは、一種異様なお金の出處だ。

預りものではないが、盗みものとも云へない。

お關どのがあゝなつてしまへば、この金をこのまゝにして置いた處で取りに来る者がない、使つてしまつた處で、尻を持つて來るおそれの無いやうな金だ。

さうかと云つて、これがこの女に所有權があるといふわけではないから、この女に使用權が附着するといふことも成り立たない。

さういふやうな事を考へてゐるうちに福松は切餅のやうな百兩包を三つ、手に取りあげたり、取り落して見たりしながら、

「わたし達の日頃の心がけがいゝから、それで白山様がお恵み下さつたのよ——御信心の

お蔭ですわ、かうなると、お關さんばかり恨んではゐられないわねえ、ねえ、宇津木様、どうかして頂戴、この大枚のお金を……わたし、あなたに、すつかりお任せしてしまひますから、煮て召上るなり、焼いて召上るなり」

「うむ」

「ねえ、あなた、これだけあれば、あなたとわたしと二人で、日本中の名所見物をして歩いて不足はありませんわね」

「馬鹿なこと」

「加賀の金澤か、越中の富山あたりへ、小じんまりした世帯を持てば、一生遊んで暮して行けやしないこと」

「ふーん」

「また、これから白山へ行く途中には、白水谷だの畜生谷なんて名前はいやな處ですけれども、どんな悪人でも隠れて一生安樂に暮せる里があるつて云ひますけれど……わたし、それは御免を蒙りたいのよ、如何に暮しよくつても、そんな處で一生を埋めてしまつては



まだ可哀相よ……ですからね、宇津木さん、斯うして頂戴、加賀の金澤といふ處は百萬石の御城下でせう、何はともあれ、二人してあすこへ落つきませうよ、さうして、わたしは自前で暢氣にこの商賣をしますから、あなた兄さんになつて頂戴——これだけ資本があれば、立派に自前で通して、あなた一人を過すことなんぞは憚りながらわたしの腕で朝飯前よ」

「まあ、何でも君のいゝやうに使ひ給へ、君には授かりものかも知れないが拙者には用のない金だ」

「あら、また、あんな小憎らしいことをおつしやる、斯ういふ御縁になつて見れば、わたしのものはあなたのもの、あなたのものはわたしのもの、でもあなたが見るのもお忌とおつしやるなら、わたし、もう、とても重くつてやりきれないから打捨つてしまひますよ」

「では、兎に角、道中だけは拙者が預からう」

「嬉しい」

「では出立いたさう」

「どうしてあなた、そんなにお急きになるのよう、前に日限のある身ではなし、あとから

追手のかゝる旅でもないのに、もつと落つてゐらつしやいな、それにあなた、飛驒の高山も今が一生の見納めぢやなくつて、二度と再び頼まれても、わたしはもう、こんな土地へ歸りやしません、あなただつて御同様でせう、一生の思ひ出にこゝで一つゆつくりとお名残を惜しまうではありませんか」

といつて、女は越し方の高山の方へと向き直りました。

仕様ことなしに兵馬が佇んでゐると、女はどうしたのか、いよく浮き立つて来て、

「ねえ、宇津木さん、こゝでわたしがお名残に、飛驒の高山で覺えた齧づくしをお聞きに入れるわ——お相手があなたぢやその方は張り合ひがないけれど、わたしの心意気だけを聞いて頂戴よ、いゝえ、あなたにお見せ申す心意気でわけぢやない事よ、これつぼつちの間ですけれども、高山には御厄介になつてゐたお禮心で、わたしこゝで、高山音頭を器量一杯にうたつて見ますわ、あなたはお相伴におとなしく聞いてゐらつしやいな」

女は高山の方へずつと向き直つて、さうしてツ、ンテンテンと口三味線をはじめました。

「聞いてゐらつしやい、古いところからお耳に入れてあげるから」



兵馬がいよく持て餘して立つてゐると、女は練り上げた聲で、

宮の八兵衛は酒お好き

お酒三杯と嫁かへた

嫁かへた……

その突拍子な調子を兵馬が呆れました。」

心安々安川を

向うに越ゆるは鍛冶屋橋

宮で角助、平湯で右衛門さ

ドン、ドン、ド、ロン、ドン

兵馬は呆れ果てゝゐるけれども、女はいゝ心持に、また調子を替へて、

おちやえ、おちやえ

おちやのうちの梨の木で

蟬が鳴く何と鳴く

つまこい〜と三聲なく  
 おちやえ、おちやえ  
 あねさの腰の巾着は  
 びろどかな  
 びろどでないが、熊の皮  
 おちやえ、おちやえ  
 「それから今度は白川おけさ……」と軽く手前口上をのべて、  
 おけさよう  
 おけさ正直なら  
 そばにもねさしよ  
 おけさ猫の性で  
 そうれ爪たてた  
 おけさよう



おけさ踊るなら

板の間で踊れよう

板のひよきで

そうれ

三味いらぬ

呆れて聞いてゐるうちに、兵馬も亦何となくいゝ心持になりつゝ行くやうです、誰はく  
だらない鄙唄だと思ふが、女はさすがに鍛えた咽喉でもあり、それにけふはいやなお客  
の前で、胸で泣きながら口で浮つくのところがひ、何だか心に嬉しいものが溢れて、全く商  
賣氣抜きで、思ふ存分唄つてのけられるのが嬉しくてたまらないものらしい、だから聲も  
はづむし、氣は加速度に浮き立つて留度がない。

そこで、おぞましくも、兵馬なるものが今は何だか自分も浮きくして、女の唄の中に  
溶かし込まれて行くやうでもあり、その唄が終るのが惜しいやうな氣もして、もつと、も  
つと——と所望して見たいやうな氣になつてゐると、

「聞き手が、あなたちや張り合ひがないけれど、でも、あなただつて藝者の謠を聞いて悪  
い氣持はしないでせう——今日はわたし、全くつとめ氣を離れて唄つて上げることよ、處  
が處ですから、箱ぬきで我慢して頂戴——今度は新しい處をお聞かせしてあげるわ、これ  
は、御鼻負になつた夕作さんといふ土地の通人がこしらへた謠なのよ——古風なのと違つ  
て、また乙な處もあるでせう、おとなしく聞いてゐらつしやいね」

思ふ殿御と

ころがり月を

晴れてみる夜が

待ち遠し

(口三味線で合の手)

梅も櫻も

一度に咲いて

よそぢや見られぬ



兵馬は、何となくいよ／＼心持に引き込まれて行くのです、事實、藝者の謠なんぞと輕蔑してゐながら、今日はどうしたか、それからそれと深みに引き入れられて思はずうつとりとしてしまつた處を、

「まあ、あなた、わたしの謠を感心して聞いてゐらつしやるわね、頼もしいわ、そりやあなただつてお若いんですもの、謠を聞いていやな氣持ばかりなさる筈はないわねえ、お若いうちは食はず嫌ひから皆さん、堅さうなことをおつしやいますけれど、人間が、ほぐれて行くほど、お酒の味も、咽喉の味もわかつて參りますのよ、あなたといふお方も、もう、こつちのもの、これから、わたしがみつちり仕込んであげるわよ、處でもう一つ、今度は、飛驒の高山の土地の謠でない、本場のお座附をわたしあなたの爲にうたつてあげるわよ」

さうして、鶯の鳴く前藝まへげいのやうに咽喉をしめして、何か本格の藝事をはじめようと構へた時に、兵馬が、別の方向にふと聞き耳を立てました、女の方も何か少しおびえて來まし

た。

氣のせいかな、峠の向うで人の聲が頻りにガヤ／＼とし出してゐる。」

兵馬は、ひらりとその音の方を見届けに行きました。

十一

峠の鼻の處まで物見に出て行つた宇津木兵馬は、少しく狼狽の氣味を以て取つて返して來ました。

「困つた！」

「誰か參りますの」

「人が登つて來る——しかもその人が、佛頂寺彌助ぶつちやうじやすけと丸山勇仙らしい」

「えッ、佛頂寺！」

と云つて、さすがの福松が、今まで晴々してゐた面の色をさつと變へました、兵馬も同じ思ひと見えて、



「あの連中と逢つては爲にならない」  
 「隠れませうよ——早く」  
 「隠れるに越したことはあるまい」  
 「さあ、早く、あなた、これをお持ち下さこ」  
 二人は秋草を分け、木の間を分けて、早くも目ざした處の樅の大木の二本並んだ木の蔭へ来て、葉の茂みに身を隠してしまひました。  
 ほど經て——のつし／＼とこの峠の上へ、無論高山とは反對の側、白山道の方からです——身を現はした最初の一人は、まがふかたなき佛頂



寺彌助——やゝ後れてそれにつよく丸山勇仙。  
 「たしかにこゝで人聲がしてゐたよ、來て見ると誰もゐない」  
 「さうだ／＼、たしかに女の聲で話をうたつてゐた、しかも甚だいゝ聲で唄つてゐたに相違ない」  
 「それを楽しみに來て見ると、どうだ、誰もゐない」  
 「では、あちらの下りに向いたかな」  
 「いゝんや——謠がぼつりと消えたのが心外ぢや、あれだけに意氣込んで唄つてゐたのだから——向うへ





下るにしても餘韻といふものが残らなければならない」

「それは、ぼつりとやんで跡形もないのだから、こいつ、我々の來ることを知つて、怖れをなして隠れたな」

「或はさうかも知れん」

「併し、いゝ聲であつたよ」

「聲だけ聞いてゐると、まさに惚々したいゝ聲であつたが……姿を見ると案外の代物、後辨天前不動といふ例も多いことだから寧ろ見ない方が我々の幸福であつたかも知れない」

「だが、それにしても心残り千萬、聲のいゝ奴がきつと姿が醜いと定まつたわけのものぢやない、殊に……」

「えらく御執心ぢやな」

「別に執心といふ次第でもござらぬが、飛驒の山々や、加賀の白山、白水谷にはこれではなかなか隠れたる美人が多いとのこと、傳へ聞く、悪源太義平の寵愛を受けた八重菊、八重牡丹の姉妹は都にも稀なる優物であつたさうな、また傳へ聞く南朝の勇士、畑六郎左衛門

時能もこの地の木地師の娘に迷うて、紅涙綿々の恨をとどめたさうな、すべて山中の女は聲清らかにして肌が餅の如く、色が雪のやうに白いと申すことぢや、不幸にして我々未だその隠れたる山里の美人に見參せぬによつて……」

「は、は、は、故實まで研究しての上の御執心ではかなはぬ、いづれそのうち海路の日和といふものもござらう、氣永く待つことぢや」

「どれ、この邊で一休み」

それは、今まで兵馬と福松とが休んでゐた處と略ほ同じ地點。

「それにいたしても、何となく……人臭いぞ……」

「人臭い？」

二人はお伽噺にある小鬼かなんぞのやうに、鼻をひこつかせて、そのあたり近所をながめてゐるうちに、

「や！ 此處に」

「そうら見ろ」



丸山勇仙がまづ杖の先に引かけて手に取り上げたのは、色友禪の胸巻でありました。

「そうら見ろ」

佛頂寺彌助は、勇仙からつきつけられた色縮緬の胸巻に、緒顔よすがんを火のやうに映らせて、  
「こりや只者でござらぬ」

まさしくは三百兩の金を今まで呑んでゐたその脱殻ぬがらなのだから只者ではない、右の大金をたんまりと呑んでゐたばかりではない、なまめかしい人肌ひとはだにしっかりとしがみついてゐたほとぼりがまだ冷めてゐない代物。

佛頂寺は高師直たかしのりただが、鬮谷ひつがの妻からの艶書でも受取つた時のやうに手をわなゝかせて、その胸巻を驚極おどろきみにすると、両手で揉みくちやにするやうなこなしをして、

「さてこそ、まだ遠くは行くまい」

「は、は、は」

と丸山勇仙の笑聲が白々しい。

「まだ、温味ぬくみがあるか」

と、丸山から擲擲ちやくちやくひ氣味に云はれて佛頂寺彌助は友禪模様に、いよく面を赤くはえさせ、

「まだ遠くは行くまい」

「炭部屋すすべやの中をたづねて見さつしやい」

「馬鹿にするな」

丸山勇仙も冷かし氣味であり、擲擲ちやくちやくひ口調くちやうであるけれども、その、は、は、は、と冷笑する處に何となくすさまじい響がする、佛頂寺彌助に至つては、右の縮緬の胸巻を面へこすりつけるやうにして、面と手をわなゝかせたり、また、急に思ひ出したやうに、忙しく前後左右、原、藪、木立を見透したり、どうしても落ちつかないものになつてゐる。

その癖、二人のゐる四邊は、眞晝であるにかゝはず、急に白けきつてしまつて、二人の者が、こだまにでも躍る亡者もうしやのやうに見える、この二人が、亡者の様にフラ／＼と行方定めず歩いてゐるのは今に始まつた事ではない——五體もあり、無論足もあり、人間たる事は紛れもないが、二人がのこ／＼と歩くところは、どうあつても白晝の亡者もうしやとしか見えない。

「おい、隠れるなよ、隠れたつてわかるぞ、我々共とても鬼でもなければ虎狼とらおおかみでもない、



みだりに取つて食はうとは云やせぬぞ、これへ出て、もう一度今のいゝ咽喉のどを聞かしてくれんかいな」

佛頂寺彌助が、四方を見廻しながら、咽喉が乾いて舌なめずりでもするかの如く、云ひかけたのが四方の静かな峠路の林まで沁み入るやうに響き渡りました。

## 十二

木蔭きかげから、息を殺して、こちらをうかゞつてゐた福松は、

「あら、大變！ 佛頂寺の奴に胴巻を拾はれちやひました」

「抜かつたな」

兵馬も答へると、

「あら〜、佛頂寺がこつちへやつて来るわよ」

「周章あはてするな〜」

と云つて、兵馬も同じく木の葉の間から、眼を放すことではなかつたが、色縮緬の胴巻

を拾ひ取つた佛頂寺彌助が、鬘かみを分けて、づつし〜とこちらに向つて歩み來り居ることは事實なのであります。

まさか、これだけの距離があつて、さうして物蔭にゐて彼等に見咎められよう筈はないのだが、現に、こちらを指指して佛頂寺がズン〜と鬘を分けてやつて來るから、兵馬も動揺しないわけには行かないでゐると、

「どうしませう、どうしませう……あら、佛頂寺の奴、こつちをあんな眼つきをして睨めてゐますよ、たしかに見つかつちまつたのよ」

と云つて、福松は兵馬にしがみつきました。

「まさか！」

併し、いよ〜感づかれて見つけられたとなつたらその時のことだ！ 兵馬も腹を決めてゐると、

「今度は、見捨てちや忌よ、宇津木さん！ わたし佛頂寺に引渡されるのは、もう御免よ」といつて、福松はぐん〜と押しつけて來るものだから、兵馬は、たち〜と後ろの櫓ぐら



の木に押しつけられてしまひました。

この女として、恐怖は恐怖に相違あるまいけれど、これは必要以上に押しつけて來るとしか思はれない、兵馬はその必要以上に押しつけて來る女の體からだを持て餘し氣味で、

「あの連中まだこんな處を、うろ／＼してゐる、佛頂寺の故郷といふのが越中の富山トヤマにあつて、あちらの方へ行くと云つてゐたが、今時分何の必要あつて此の邊をまだうろ／＼してゐるのか、解げせないことだ」

「人浚ひとまじひ見たやうね」

「あれで、惜しい男なのだ、練兵館れんべいぐわんでもあの位腕の出來る奴はないのだが、心術がよくないため長州の勇士組から見放され、師匠、篤信齋からも勘當を受け、さうして今はあゝして亡者もうしやの體となつて諸國をうろついて歩いてゐる」

「悪黨のやうで、それで思ひの外さつぱりした處もありますのね」

「うむ——本來あれで一流の使ひ手なのだから」

「新お代官みたやうに、しつゝこい忌な處はないけれども、でも氣味の悪いこと、手足の

冷つたいこと、全くこの世の人のやうぢやありません」

「自分でも亡者もうしや々々と呼んでゐる」

斯う云つて二人は物蔭で私語さしごき交してゐたが、

「あら、また、やつて來ますよ」

一時、立止つて、こちらを透して見てゐたやうな佛頂寺が、またのつし／＼と草原を分

けて來るので、福松はまた兵馬に一層深くしがみつきました。

成ほど、執念深い彼等のことではあり、異様な六官が働いて本當に我々のこゝにゐるのを氣取けとつたかな、もしさうだとすれば……兵馬はこゝで却つて機先を制して、こちらから身を現はして出て行つて見ようかと思つたが、それは女にからみつかれてゐて遽たじかに轉身てんしんが利かない。

さうしてゐると、突然、あちらの方で、

「佛頂寺！、佛頂寺！」

高らかに呼ぶのは丸山勇仙の聲であります。」



「何だい」

それに答へる佛頂寺の聲が、今日はいつもより一段と太くてすさまじい。

「松茸の土瓶蒸をこしらへて食はすから來い」

「ナニ、松茸の土瓶蒸！」

と、云つた返事がやつぱりすさまじく四邊にこだまして聞える。

佛頂寺が振り返つて見ると、丸山勇仙が以前の地點で盛に火を焚きつけてゐる。

「ふ——ん、松茸の土瓶蒸と聞いちゃ、こてえられねえ」

佛頂寺は佛頂面をしながら、でも、松茸の土瓶蒸がまんざらでもないと見えて、しぶく引き返して行くのです。

### 十三

佛頂寺が以前の地點へ立ち戻つて見ると、丸山勇仙は、もう甲斐々々しく料理方を立働いてゐる。

成程、土瓶蒸の獻立がすっかり出来上つてゐる、原料の松茸は途中心かけて山路で採集して來たものであらうし、それを土瓶に仕かけて水を切つて、火を焚きさへすれば、口へ運べるやうにとゞのへて持つて來てゐるらしい。

おまけに彼は一瓢をも取り出して、そこへ並べてゐるのは、松茸の土瓶蒸だけでなく紅葉を焚いてあたゝめるの風流にも抜かりがないとは何と優しい事ではないか。

佛頂寺はそれを見ると、相當に佛頂面をほぐして、草を褥しとねにとつかと腰を卸した處へ如才なく丸山勇仙が猪口をつきつけました。

「松茸の土瓶蒸で一杯やるかな——」

佛頂寺が佛頂面に涎を流してそれを受ける。

斯くして二人が、土瓶蒸を肴に、取敢ず一杯づゝの毒見を試みてゐる。

旅に慣れた彼等は、即席の調理方に要領を得てゐる、小鳥峠の上を會席の場として選定したことも亦處に應ずの要領を得てゐる。

斯くて彼等は、飲み、松茸蒸を味ひつゝ漸く興が深くなつて行く筈なのに、今日はどう



したものか佛頂寺が至極浮かない、いつもさう浮き立つてばかりゐる男ではないが、今日は特に一杯盃を啣むごとに一杯づゝ減入つて行くやうな氣色がいぶかしいのです。

「丸山」

「何だい」

「けふの酒は、また一段と旨いし、松茸蒸も頬つべたが落ちさうに旨いけれども、どうもおれのこの胸が、この心が、ちつとも浮いて來ないわい」

「ふ——む、悪いものを見せたからなあ、色縮緬の女物なんていふのは佛頂寺には虫の毒なんだ」

「いや、それぢやないなあ」

「は、は、は、何か別にお氣もじ様な一件があるのかい」

「どうも面白くないな、斯うして酒を一杯飲むごとに胸が重くなる」

「冗談ぢやない、酒は憂鬱を掃ふ玉帚と云ふんだぜ、酒を飲んで胸を重くする位なら重涙を食べて癢てゐた方がいよ」

「だが、丸山——酒は旨いんだよ、肴は申分ないんだが、この胸だけが、だん／＼と苦しくなる」

「病氣でも起つたのかい——鬼の霍亂で奴で」

「さうぢやない——病氣なんていふ奴は本來佛頂寺の門前を避けて通ることになつてゐるのだが、今日は何となく氣が塞ぐよ」

「困つたもんだな、天氣はこの通りよしさ、處は名代の小鳥峠の上で、紅葉を焚いてあたためた酒を飲みながら、手取りの松茸のびん／＼したやつを手料理、これで氣を塞がれちやあ、土瓶も松茸も泣くだらう、第一、板前の拙者がいゝ氣持はしないや、浮きなよ、浮きなよ、」

「浮かない、どうもこの胸が、一杯飲む毎に沈んで行く、と云つて、酒はやつぱり旨いだ、肴に申分もないし、天氣はいよし——」

佛頂寺は盃を啣みながら四方を見廻す、至極晴れやかな小鳥峠だけれども佛頂寺に見廻されると、急に白ちやけて來るやうになる、丸山はその氣を引立てようとするかの如



「不足を云へば、たほが一枚缺けてゐるだけのもんだ、この席へ今聞いたやうな叫喚が一本入れば、それこそ天上極樂申分ないのだが——望月の缺けたることのなしといふのは却つて不祥だよ、この邊で浮きなよ、浮きなよ」

「浮かない——一杯、飲めば飲むだけ氣がふさぐ」

「弱つたな、斯うして働いて御馳走をしてやつて、その御馳走を食はないならいゝが、散々食ひ且飲まれながら——口上げに氣が塞ぐと云はれたんぢや、全く板前がやりきれない」と云つて、丸山勇仙がつまらない面をして佛頂寺の面を見なほす。

「丸山、つまらねえな」

「何が……」

「つまらねえよ」

「何が、どうして」

「酒を飲んでも、浮かばれなくなつたんぢや、もう見きり時だ」

「いやに、濕めつぽいことを云ひ出したもんだな、併し……」

と、丸山も少しく思案して見ての上で、

「さうだつてな、李白の詩に酒を飲んで愁を銷さんとすれば愁更に愁ふといふのがあつたつて、あれなんだな」

「どれだ」

「まあいゝや、酒といふ奴が必ずしも人を浮かすと定まつたもんぢやないんだから、何でもいゝから飲みな佛頂寺、遠慮なく飲みな、そのつもりで、この松茸と相應するほど、ろみが仕こんで來てあるのだから」

「飲むのは辭退しないよ、たゞ一杯飲む毎に氣が減入る」

「まだあんなことを云つてやがる、勝手にしな、處で、こつちも人に飲まれたり愚痴を聞かされたりばつかりしてゐてはうまくないから——これより思ふさまお相伴と致して」

丸山勇仙も、この邊から板前を辭して自分も會席へ進出しました。



ところが、自分が飲み出して見て、丸山勇仙が、

「佛頂寺」

「うむ」

「旨いなあ——この酒は」

「旨いな」

「松茸も旨いだらう」

「旨いよ」

「浮きな」

「浮かない」

「では僕が大に浮いて見せよう」

丸山勇仙は浮かない佛頂寺を浮き立てるつもりで、自分がぐいぐいと手酌てしやくで盃を重ね

ながら潮く浮き立たうとつとめたが氣のせいか詭まごへ向きに浮いて來ないらしい。

そこへ佛頂寺が、また横の方からすさまじい聲で呼びかけました。

「丸山」

「何だい」

「抑々、我々は、これから何處へ向つて行かうといふのだな」

「君の郷里、越中國氷見郡へ出ようといふことになつてゐる」

「駄目だ、駄目だ、佛頂寺が此佛頂面を下げて、今更のめくと故郷へなんぞ歸られると

思ふか」

「今それを云ひ出されちや遅い、では、此の邊で立ち戻りの辨慶とやらかすか」

「一體、何處へ立ち戻るんだ」

「さあ、そいつはお前の方から聞きてえんだ、やむを得ずんば江戸へ引返すかな」

「江戸——江戸へ出て、あのやかまし老爺おぢの篤信齋とくしんさいの毒どくを見るのは頼だ」

「では、どうだ、長州へのしては」



「長州は今、尊王攘夷で國を寢かすか起すかと沸いてゐる。あんな處へ、我々は飛び込めない」

「だから、大いに勇士の來ることを期待してゐる、君でも行けば此の際大いに歓迎するだらう」

「なかく」

「奇兵隊を率ゆる高杉晋作なども、まんざら知らぬ面でもあるまいから、訪ねて行つたら面倒を見てくれるだらう」

「だが、佛頂寺も面がすたつたからな、ぬけく〜と出て行つて、佛頂寺來たか、貴様劍術が出来ても心術がなつてゐないなんぞと、高杉あたりにあの調子でさげすまれるのが續だ」

「では、何處へ行く」

「さあ、それだ」

「いつたい、我々はこれから何處へ落つたのだ、ギリ〜の返答が聞きたい」  
「どつちが聞きたいんだ」

佛頂寺と丸山はこゝで面を見合せたが笑ひもしませんでした。

「丸山」

「何だ」

「お互は亡者だな」

「まあ、そんなものだらう」

「宙宇に迷つてるんだ」

「まあ、そんなものだ」

「天へも上れず」

「地へも潜れずかな」

「東の方、江戸表も鬼門」

「西の方、長州路は暗劍」

「のめ〜と故郷へは歸れず」

「さうかと云つて、また來た道を引返すのはうんざりする」



「所詮……」

「考へて見ると……」

「我々は、何處へ行かうと云つて思案するよりは」

「何の目的で斯うして旅をして歩かねばならないのか」

「それよりは一層——何故に、我々は生きてゐなけりやならねえのか、そいつが先だ」

「むづかしい事になつてしまつたぞ」

「考へて見ろ、おれも貴様も何の爲に生きてゐるのだ」

「そいつは困る」

「困るたつて、それを解決しなければ、永久に斯うして亡者として、八方塞がりの籠の虫をうろく／＼彷徨いて無意味に行きつ戻りつしてゐなけりやならん」

「何分已むを得んぢやないか」

「處が今やその已むを得ざることが得られなくなつてしまつた——おれはもう、斯うして旅から旅の亡者歩きに大抵倦きてしまつたよ」

「だつて、已むを得んぢやないか、君ほどの腕を持つてゐながら、此の手腕家を要する非常時代に一向用ふる處がない、拙者と來た日には君ほどの腕のないことは勿論だが、儒者となるには學問が足りない、醫者となるべく術が不足してゐる、英學をかちつたが物にならず、仕官をするには物臭い、日雇に雇はれるには見識があり過ぎる——亡者としてゐるつくより外には道がないぢやないか」

「その亡者として生きる道が、もう、つく／＼おれは厭になつたのだ」

「では、どうすればいゝんだ」

「考へて見ろ」

「考へろたつて、この上に考へようはありやせん」

「齋藤篤信齋は劍術を使はんが爲に生きてゐる」

「うむ」

「高杉晋作は尊王攘夷の爲に生きてゐる」

「うむ」



「徳川慶喜は傾きかけた徳川幕府の屋臺骨の爲に生きなけりやならん」  
「うむ」

「西郷吉之助は、薩摩に天下を取らせんが爲に生きてゐる」

「うむ」

「小栗上野は、幕府の主戦組の爲に生きてゐる」

「うむ」

「勝麟は勤王と倒幕の才取の爲に生きてゐる」

「うむ」

「岩倉具視は薩長を利用して、薩長に利用せられざらんが爲に生きてゐる」

「うむ」

「土佐の山内や、肥前の鍋島は薩長だけに旨い汁を吸はせてはならない爲に生きてゐる」

「うむ」

「會津、桑名は徳川宗家擁護の爲に生きなけりやならん」

「うむ」

「さて、それから宇津木兵馬は……」

「は、は、は、少し、人物のレヴェルが變つて來たな」

「宇津木兵馬は、兄の仇を討たんが爲に生きてゐる」

「うむ」

「お銀様といふ女は、父に反抗せんが爲に生きてゐる」

「うむ」

「机籠之助は無明の中に生きてゐるのだ——處で、佛頂寺彌助と丸山勇仙は何の爲に生きてゐるのだ」

斯う云つて、佛頂寺彌助のカラ／＼と笑つた聲が、またもすさまじく、森閑たる小島峠の上にこだましました。

「松茸の土瓶蒸を食はんが爲に生きてゐる、あッ、は、は、は」  
と合せた丸山勇仙の聲も、決して朗な聲ではありませんでした。」



その後、かなり長い間、沈黙が続いたが——佛頂寺はそれでも酒をやめるのではなく、苦り切つて一杯々々と重ねてゐる。

大いに浮かれを發するつもり丸山勇仙までが、いつの間にか引き入れられて濕つぽくなる、強ひて氣を引き立てようとするが、どうしても引き立たないらしい。

「佛頂寺」

「何だ」

「いやにしめつぽくなつたな」

「その癖天地は此の通り上天氣だ」

「處は長閑な小島峠の上で」

「丸山、おりやどうでも死にたくなつてしまつた」

「は、は、は」

この時、丸山勇仙が強ひて笑ひ崩さうとしたが一層重苦しい。」

「死にたくなつた」

「は、は、は、は」

死ぬのがいゝとも云へず悪いとも云へない、丸山勇仙は、たゞ強ひて重苦しく笑ふだけであつた、笑ひも斯うなると唸きよりも澁濁である。

「死にてえ、死にてえ」

と佛頂寺彌助が捲舌をつかひ出す。」

「くたばりやがれ！」

と、丸山勇仙が悪態をつき出す。」

「それれ」

と佛頂寺が最後の一杯、舌一滴と見えるのを、深く腸の底まで送り込んで、その盃を勇仙目がけて投げつける、勇仙がそれを受けて、手酌で一杯引かけようとしたがもう酒が盡きた。



「丸山——おれは死ぬぞ、どう考へても生きる口實を見失つたから、これから本當に死んで見せるのだ、検視をつとめさつしやい」

と云つて佛頂寺彌助は、着てゐた羽織を脱ぎにかゝりました。

「本當に死ぬのか」

「うむ——見て居さつしやい」

「冗談ぢやなからうな」

「冗談から駒の出ることもある、いのちヶ原の時だつてさうだ」

「今は、どうするつもりだ」

「どうもかうもありやせん、お前は、たゞ黙つて最期を見届けてゐさへすりやいゝんだ」

「佛頂寺——いやに眞剣だな」

「眞剣だとも」

羽織を脱ぎ終つた佛頂寺彌助は、それを草原の上に敷いて、その上に、草鞋わらじをぬいでどつかと座を占めたものです。

「佛頂寺、變な眞似をするなよ」

丸山が漸く周章あはれでしたが、佛頂寺彌助はそれに取り合はないで、その次の仕事が内ぶところへ兩手を入れ、徐ろに諸肌もろはだを脱いでしまつたところです。

「風邪をひくよ、風邪を、變な眞似をするなといふことよ」

「いゝから、黙つて最期まで見届けるんだ」

「な、なにをする！」

丸山勇仙が、非常に狼狽して佛頂寺の膝に取りついたのは、彼が第三次の事業として疊紙をひろげて二つに折り、それから刀を取つて膝の上に置き、やをら鞘を外してしまつてその程よき處を疊紙に持ち添へて構へたのがどうしても切腹に取りかゝるもののふの作法とより外は受取ることが出来ないで、丸山勇仙が眼の色をかへて佛頂寺の膝に取りついた時に佛頂寺は、

「何だ、丸山、貴様留めるつもりか、拙者が覺悟を定めて尋常に死にくだばらうとするのを見て、今更貴様留め立てをしようとするのは奇怪だ、留めるなら留めるだけの意義と



理由を以つて留めろ」

佛頂寺彌助が傲然と叱咤するのを丸山勇仙はテレきつて、

「意義も理由もありやしない、豫告なしに眼前で腹を切らうといふ奴を、友人の身として見てゐられるかゝられないか、僕に向つて、留めだてをする意義と理由とを求める前に、佛頂寺——君はなぜ、今になつてさう急に腹を切らなければならないのか却つてその意義と理由を示せ」

「その意義と理由がわかる位なら腹を切りやせぬ、それがわからないから腹を切るのだ、貴様、留めるのなら留めるでいゝが、これから先き佛頂寺彌助が、何故に生きてゐなけりやならんか、その講釋をして聞かせろ」

「むづかしいことを云ふなよ、今、死ぬ位ならもつと早く相當死に場所もあつたらうぢやないか、こゝまで来たんだから、もう少し延ばして相當準備をとゝのへてからにしちやあどうだ、相當の準備期間を……」

「生きて行くには相當の準備もいるだらうが死ぬに準備は要らない、出たところ勝負で結

縛

「だつて、そりや、あんまりあつけないこつた、せめて——明日まで延ばして呉れよ、明日まで……明日になると、また何か風向が變らぬとも限らん、佛頂寺、貴様は、今不意に死神に取りつかれたんだ」

「は、は、は、死神に取りつかれたんぢやない、死神を出し抜いてやるのだ、死神といふ奴は、いつも人を出し抜いて狼狽さすから、今日は一つ佛頂寺が先手を打つて死神を狼狽させてやるのだ、は、は、は、丸山、さういふお前の面に死神がのりうつゝてゐるよ」

「冗談云ふない、冗談云ふない、おりやまだ死ぬのは忌だよ」

「だから、生きて、介措を頼むとは云はない、佛頂寺の最期を、おとなしくちやんと見届けてゐて貰ひたいのだ、さあもう覺悟は定まつた、放せ、放せ、離れてゐろやい、丸山勇仙」

「だつて佛頂寺、二人共に影の形に漲ぶが如く、これまで来て、それも兩人覺悟納得の上なら知らぬこと、今日突然、貴様だけが死ぬといふのに此の丸山が指をくはえて見てゐら



れるか」

106

「見てゐられなけれや、どうするのだ」

「どうするつたつて、まあ兎も角も一應思ひ留まつてくれ給へよ」

「思ひ留まれねえ、斯うなつて思ひ留まれる佛頂寺だと思ふか、思ひ留まらなると定まつた上は、貴様はどうする」

「どうするも、斯うするもありやしな、腹を切ります、はいお切りなさい、友人としてそれが云へるか、云へないか……」

「云へなけりや、どうしようといふのだ、一匹一人の男が死なうと覺悟したものを貴様の瘦腕せうわんでどうしようといふのだ」

「理窟りくつをいふなよ、理窟を」

「理窟ではない、貴様がどうしても無用の留立をして、こゝで拙者の往生際わうじやうさいを邪魔立じやまだてしようといふなら、して見ろ、足手まとひの貴様から先に叩き斬り、佛頂寺は心置きなく腹を切つて死ぬまでだ」

「いやに恐こはい目をするぢやないか、佛頂寺、君がそれほどまでに死にたくなつたんぢや是非もない、いかにもおれの瘦腕せうわんぢや、佛頂寺の死に際を取り抑へるわけに行かんのは決まつてゐる」

「だから、おとなしく、それに坐つて、拙者の腹の切り方と、往生際を、またゝきもせずに見届けてゐる事ぢや」

「ぢやと云つて——友達が死ぬのを、いゝ氣でおとなしく、眺めちやあゐられまいぢやないか」

「なあに——生なまやさしいのが、ぢたばたするんぢやない、佛頂寺ほどの亡者が得心づくで腹を切るのだ、見てゐるうちには胸が透すいて来るよ」

「馬鹿な——何等の意義も理由もなく、友達が腹を切る、よろしいお切りなさい、拙者が傍そばから切りつぶりを拜見はいけんなんて済ましてゐられるか」

「済ましてゐられなけりや、濁にごつてなりと、かぶつてなりと見て居れ、そんなことにかゝはつちや居られん、ど——れ」

107



佛頂寺彌助は遂に長い刀の物打の上あたりを半紙で搦んで、左の手で襟を押しひろげてその腹を撫ではじめました。

「佛頂寺——」

「何だ、泣き聲を出すな、不祥な聲を出すとは佛頂寺が冥途のさほりになる」

「まあ、佛頂寺——」

「何だい、今となつて、佛頂寺、佛頂寺云ふない」

「まあ、佛頂寺、もう少し待つて呉れ、留めるんぢやない、おれにも少し了見があるから、もう少し待つてくれ」

「何だ、貴様の了見といふのは……」

「佛頂寺、實はな、おれも一時は面喰つてお前の最期を留め立てをして見たんだが、よく考へて見ると此方も御同然の身の上だつたんだ、お前が生存の意義と理由とを見出し得ない如く、この丸山勇仙もそんなものが見つけられないでうろついてゐるのだ、だから、お前がその理由によつて死ななければならぬとすれば、この丸山勇仙も残つて生きてゐな

けりやならん必要と意義とが無いのだ、それを今やつと考へついたので」

「さうだ、貴様だつてこれから生きのびて尊王攘夷をやるといふ柄でもなし、新選組に加はるといふ柄でもないのに決まつてゐる」

「そこでだ——お前が死ぬとなれば、おれも死ぬ——となぜ最初から云へなかつたのか、それが考へて見ると不思議だ」

「う——む」

「だから佛頂寺——留め立てるなあ、愚劣千萬だつたよ、お前が死ぬんならおれも死ぬよ、もう明日だの一時待てだのなんて云やしないよ、今日、この場で、お前と枕を並べて死ぬのが、當然過ぎるほど當然なる容易い仕事であつたのだ、當然さう行かなければならない筈のを、なぜ、見つともない狼狽へ振りをして見せたのか、今となつて、不思議だ、多分お前の云ふ通り、先手を打たれた死神の奴が狼狽して、お前にはとりつけないから、おれの手を借りてお前の勝利を攪亂しようとなつてたのだらう、もうわかつたよ、死ぬよ、お前と一緒に、おれもこの峠の上で今日只今死んで見せるよ」



「は、は、は、は」

「お前だつて人の留め立てを差留めて置きながら、おれの死ぬのをよせとは云へまい、おれだつて影の形に添ふが如く、これまで亡者うるつきにうるついで来て、お前を死なしてこれから獨り旅が出来るものか出来ないものか、つもりにもわかりさうなものだ、そのつもりにもわかるべきことが今迄わからなかつた、死神奴に攪亂されてゐたのだ」

「さう、事がわかつたら、お互に生の自由と死の自由とを尊重することだ」

「善は急げだ——話が定まつたらぐづくしないが、處で、佛頂寺、お前は劍を以つて世に立つて劍で果てるのだから切腹が當然だが、僕の方はさうは云かない、劍道が本職ではなし、萬一切り損なつて、お前に最期の道を先立たれ、あとからのたうち廻つて追かけるなんぞは醜體千萬だから、斯ういふ時の用心に僕は僕だけの死に方がちやんとあらかじめ附いてゐるのだ」

「さうか」

「僕は、かねてより今日あることを慮つて、こゝにこれ、舶來の硫酸といふ劇薬が一壺仕

込んである、これを、ちよつと煽ると五臟六腑が焼け爛れて、完全に生命が解消される、腸を沁み込んで行く間はかなり苦しいさうだが、切腹とどちらか、その苦痛の程度の比較は知らないが、やり損ひなしに死ぬることは請合なのだ、そこで、君が腹へ刀を突き立てると同時にこいつを僕が一滴づゝ口中へ垂らし込む」

と云つて荷物の中からグロテスクな小壺を出して見せる。

「う——む、面白いな、貴様もなか／＼馬鹿でない」

「話が定まつたら、心靜かに——併し、善は急げだ」

斯う云つて、丸山勇仙は毒薬を下に置き、佛頂寺と同じやうに、羽織を脱いで草原の上に敷きました。

## 十六

やがて、佛頂寺が刀を腹へ突き立てると同時に、丸山勇仙が小壺を口にグット仰ぎました。



「佛頂寺、痛いだらう」

「うむ——」

と、云ひながら佛頂寺は、その刀を引き廻し、

「丸山、薬は、薬は利いて来たか」

「まだ何ともない、痛みの至る程度から云へば、お前のは比較になるまい、あ、それにしても胸が變だ、腹が痛い」

「しつかりしろ」

「佛頂寺、痛いだらう」

「そりや、痛い、腹も身のうちといふからな」

「我慢しておれも……」

この時分に、丸山の腹に硫酸が浸漸をはじめたらしく、

「苦しい、思つたより苦しい！」

と叫びましたが、

「がんばれ！」

と、佛頂寺が聲をかけると、丸山は、

「あゝこの苦しみは別だ、まるで五臓六腑が焼け出したやうだ、噴火山から溶岩が流れ出して村里をのたうち廻るやうに腹の中を熱いものが引掻き廻す、佛頂寺、おまへのも樂ぢやあるまいが……」

「樂ぢやない——」

「僕のは苦しい、同じことなら、腹を切るんだつた、こんなに……毛膚の薬がこんなに利くとは思はなかつた、苦しい」

「愚痴をいふな」

「たまらない——誰れか早く引導を渡して呉れ」

「我慢しろ」

「うむ——」

丸山勇仙は、しつかりと大地につかまつて堪へてゐる、佛頂寺は全力をこめてキリク



と刀を腹の中へ出来るだけ強く突きこんで引き抜き廻してゐるが、苦しがつてゐる。でも、丸山勇仙に同情するの餘裕がいくら残つてゐると見えて、

「丸山、苦しまぎれにさつきのあの受け渡しをもう一べん繰り返せ、それが引導だ」

「うゝむ、うゝむ」

「いゝか、齋藤篤信齋は劍術をつかふ爲に生きてゐる」

「うゝむ、高杉晋作は……尊王攘夷の……爲に生きてゐる」

「徳川慶喜は……」

「うゝむ」

「小栗上野は……」

「うゝむ」

「勝麟は……」

「うゝむ」

「岩倉は……」

「うゝむ」

「土佐と肥前は……」

「うゝむ」

「會津、桑名は……」

「うゝむ」

「さうして、佛頂寺彌助と丸山勇仙は何の爲に生きてゐるのだ」

「うゝむ」

「うゝむ、何の爲に」

「うゝむ、生きてゐる……」

「うゝむ、松茸の土瓶蒸を……」

「うゝむ、食ふ爲に……」

「うゝむ、うゝむ」

ここで、遂に二人の舌が硬ばつて呂律が廻らなくなり、丸山勇仙はもう受渡しどころで



はなく、そこらをのたうち廻つて苦しみ出したが、佛頂寺の氣は、なほ確かで、存分に腹を灸ぐつて上へハネ、やがて刀を返して、咽喉へ持つて行つて、一氣に咽喉笛を掻きつてしまつたから、萬事はおしまひです。

ほとんど同時に丸山勇仙も動かなくなりました。

## 十七

それを遠く、物蔭ものかげにうかゞつてゐた女が云ひました。

「御覽なさい、いゝ氣ぢやありませんか、男同士二人、水入らずで、峠の上で飲めよ唄へと、さんぐ騒いだ揚句、とう／＼いゝ心持で寢込んでしまひましたよ」

兵馬も亦、さうだと信じてゐる、この可なり隔たつた距離の點から、うかゞつてゐると二人の舉動は、萬事いゝ氣持づくめとしか見えなかつたものです。

紅葉を焚いて、酒と松茸をあたまめて食べながら、出まかせの太平樂を並べて、それが相當に並べつくされた後、處を嫌はずいゝ心持で寢そべつてしまつたのだと見るより外には

見やうがなかつたのです、何故に生きねばならないかの疑問と、これより先へは一寸も歩けない倦怠けんたいが二人を備まして、その間に受け渡された、憂鬱いゆううつ極まる問答の聲は決してこゝまで届かなかつたものですから、兵馬も、

「暢氣のんき千萬な奴等だ——あゝなると全く箸にもかゝらぬ」

「でも、可愛らしいところがあるぢやないの、人間はアクどいけれども、あゝして行きあたりばつたりに、酔つては寢、寢ては起き、起きては旅——といふ氣持だけは羨ましいわ」

「あれだけの氣分で彼等は生きてゐるのだ」

「わたしたちだつて、あの氣分で生きて行きさへすれば文句もんぐはございませんね、旅から旅を、氣任かせに、酔つばらつて寢轉ねころんだところが宿で、起きてまた歩きだすところが旅——あゝして一生が送れゝば、あれも亦いゝぢやありませんか」

「御當人達はよろしいとしても、差當り、こつちの動きがとれないには困る」

「困りやしないわよ、向うが向うならこつちもこつちよ、根くらべをしようぢやありませんか」



「馬鹿な事を」

「あの人達が、頭張り通すまで、こつちも此處を動かさないことにしてはどう、ねえ、宇津木さん」

「さういふ緩慢な事はして居られない——兎に角、彼等が眠りに落ちたを幸、この間に摺り抜けることにでもせんと」

「まああなたは、どうしてそんなにせつかなのでせう、少しはあの人達にあやかりなさいよ」

と、云つて、兵馬の胸にしがみついて怖れをなしてゐた女が、兵馬の首根つこにぶら下がつて、木の實をとりたがる里の子供等が木の枝をたわむにしてぶらさがりたがるやうにしてぶらさがるものだから、

「いけない」

と兵馬は拒みました。

「忌、放して上げないことよ」

これを摺り抜けて兵馬は、

「兎に角見届けて来る」

佛頂寺、丸山の事の體を見届けに行きました、見届けると行つても、根氣負けをして、名乗りかけて切抜け策を講じようといふ氣になつたのではなく、彼等の寢息の程度を窺つて、その間にこゝを摺り抜けてしまはうとの斥候の目的で兵馬は出かけたものらしい、佛頂寺、丸山と雖も、兵馬に取つては親の敵ではなし、萬一見つかつたら見つかつた時の腹も定めて、恐る／＼草原をわけて近づいて見ると、案の如く、二人は飲み倒れて横になつてゐる、成ほど悪どい奴等ではあるが、斯うして處嫌はず飲んで寢、寢てはまた起きて旅から旅をうろつく彼等の生活も果敢無いものだが、そこに無邪氣な點も無いでは無い、と、妙な氣分に襲はれながら、兵馬は少しおかしいやうな氣持になつて、少くとも、二人のその放漫無邪氣な寢顔だけでものぞきに來たつもりで、もう一步近づいた時に、ふんと血の香を嗅ぎました。

無邪氣に酔倒してゐるのではないことを直感しました。



脱兎の如く、兵馬は秋草を飛び越えたのです、さうして佛頂寺の倒れたのを抱き起して見たのです。

「佛頂寺——佛頂寺」

兵馬は、聲高く叫び且呼んで見ましたが、返事がありません。

あはたどしく、それをそのままさうして置いて、丸山勇仙を抱き上げ、

「丸山君——丸山——丸山勇仙君」

と、立て続けに名を呼びましたけれどもこれも返事がありません。

佛頂寺は立派に腹を切り了へた上に、咽喉を掻ききつてゐる、これは反魂香の力でも呼び生かす術はない。

丸山勇仙の死體を拾ひ起して見ると——これは五體満足ではあるけれどもすでに硬直し冷却してゐることは佛頂寺以上で、只、何をもつて死んだか、殺されたかの形跡が明らかでない。

「佛頂寺君、丸山君、君達、なぜ死ぬなら死ぬやうに云つて呉れない！」

と兵馬は二人の死骸を打ちながめて叫びました。

「斯ういふ事と知つたら隠れてゐるんぢやなかつた、出て来ればよかつた——君達は死ぬ爲にこゝに落ちついてゐたとは、氣がつかかなかつたよ——死ぬんならば此方にもしようがあつたのだ、目の前で二人を死なせながら見殺しにした」

兵馬は泣いて叫びました。

## 十八

その夜、上平館の松の丸のあの座敷の大きな爐邊に、向ひ合つて坐つてゐるのは、お雪ちやんと宇治山田の米友でありました。

お雪ちやんは、一生懸命でお芋の皮をむいてゐるのであります。

その手先を、眼を据ゑたやうに、その癖、多少の氣抜けもしてゐるものゝやうに、米友がしよんぼりとながめながら、膝をちよこなんと組んで、向ふ脛の處を抱へ込むやうにして坐り込んだまゝ無言なのです。



「御覽なさい、米友さん、あなたに買つて来ていたよい庖丁が、こんなによく切れて」  
成るほど——お雪ちゃんの云はれる通り、お雪ちゃんは今、芋の皮をむくにとても、新  
しい卸し立ての庖刀を使つてゐるところであります。

「さうかなあ」

と、米友が氣のない返事をしました、氣のない返事をしても、氣の抜けたといふ意味で  
はなく、心そこにあらずして返答だけをしたものですから、何となく氣の無いやうに聞え  
るだけのものです。

「御覽なさい、今晩は、座敷中だつてこんなに明るいちやありませんか、何から何まで新  
しいものづくめで、まるでお嫁さんにでも……」

と云つて、庖刀の手を休めてお雪ちゃんが今更のやうに、此の室内を見廻したものです。  
「うむ——」

と云つて、米友は相變らず氣のない返事をして、お雪ちゃんへの義理にうつら／＼とこ  
の室内を見廻したものです。

成るほど、さう云はれて見ると、新しい、家は特別に新しくはないが、室内の調度とい  
ふものが、殆んどすべて新しく一變してゐる、それは誰が一變させたものか、問ふまでも  
なく、御本人の米友公のもたらした一つの恩恵なのであります——といふのは、米友が長  
濱から歸ることなしには、この室内もこんなに新し味が増すわけはなく、また同時に、米  
友がたとひ長濱から歸つたにいたる處で、手ブラで歸つたんでは、斯うまで室内の面目を一  
變することは出来ない、つまり、米友が無事に——あんまり無事でもなかつたけれども、  
兎に角、馬に積んだ荷物を、殆んど遺失と損傷なしに引ばつて、こゝまで戻つたればこそ、  
今晩、かうしてお雪ちゃんをして新しい氣分に喜ばしめることが出来たのです。

御覽なさい、新しいのは、単にお雪ちゃんが雪のやうな指先であしらつてゐる庖刀ばか  
りではありません、その下に据ゑた俎板も、野菜を切り込む籠も目籠も、自在にかけて何  
物か煮つゝある鍋も、爐中の火をかき廻す火箸も爐邊に据ゑた五徳も——茶飲茶碗も茶托  
も——すべて眼に觸るゝものが皆んな新しい、たゞ古いのは自在竹の煤のついたのと、新  
鍋の占據によつて、一時差控へを命ぜられてゐる鐵瓶だけ位のものですから、この室内す



べてを照明する處の光の本元としての燈明臺も無論最も新らしいものゝ一であるし、その中の燈明皿も油も燈炭も、一切が新しいのですから、お雪ちゃんの眼に見て、タンゲステン以上にまばゆく感じ、且またそれが氣分までを明るく心持よくしたのは無理もないことです。

それを、今、仕事をしながらお雪ちゃんが感謝の意を表したのだが、米友としてはそんなに有難くは受取らない、たゞお雪ちゃんが云ひかけて、云ふことを沮んでしまつたやうな唯今の一句、

「まるで、お嫁さんにも……」

と云つた言葉尻をとらまへてしまひました。

「さうだなあ、まるでお嫁さんでも……」

と、米友が続けて見たが、そこで、また何とつゞけていゝのか、さすがの米友が凝議しました。

「ホ、ホ、ホ、ホ」

とお雪ちゃんは何が可笑しいか笑ひました。

「取つたやうだな」

と、お雪ちゃんに笑はれたので、米友があはてゝ木に竹をついだやうに言葉をつゞけました。

「ホ、ホ、ホ、ホ」

と、お雪ちゃんがまた笑ひました。

木に竹をついだやうな米友の言葉の前後をつゞり合せて見ると、

「まるでお嫁さんでも取つたやうだな」

と、斯ういふのであります、お雪ちゃんとしては、此の際、米友がガラにもなくお嫁さんを引き合ひに出したそれが可笑しいのではなかつたのです、何故ならば、お嫁さん……といふことを云ひ出して口籠つたのは、それは却つてお雪ちゃん自身にあるのですから、米友が、その言葉尻を受つただからと云つて、何も可笑しがつて笑ふことはないのです、といつて特別に笑はなければならぬほどの可笑しいことはなかつたのですが、箸が轉んで



も笑ひたいといふ年頃なんでせうから、米友さんそのまゝの存在と、あたりの新しいものづくめが、ついお雪ちゃんの氣を、こんなに快活にしたものと見なければなりません。

だが、また一方、米友としても、たとひ人の言葉尻をとらまへたにしてからが、お雪さんがどうしたとか、斯うしたとかが、にないことを云ひ出すのが變だと思へば思はれないことはないのですけれども、それとても必ずしも米友の獨創といふわけではなく、

源ちゃんもつても

返事がない

お嫁さんでも

取つたのかい——

といふ俗言がある地方には存在してゐる、それを米友が思ひ出したから、ガラになくこの際應用を試みたよけのものなんでせう——さう種が知れて見れば、いよく以つて笑ふべきことでも何でもないのですが、少ししつこいが、これをお雪ちゃんが最初云つた言葉尻と比べて見ると、少しばかり「てにをは」の相違があるのでした、つまり米友は室内の調

度がこんなにすべて新しいのは、

「お嫁さんでも取つたやうだ」

といふ單純明白な譬喩の一シラブルになるのですが、お雪ちゃんのは、

「お嫁さんにでも……」

で、あとは消滅してしまつたのですから、極めて曖昧なものなのです、なほ、煩さいやうですが、文法上もう少し立入つて見れば「お嫁さんでも」といふのと「お嫁さんにでも」といふのでは主格に根本的の異動が生じて來る評合のものなのです。

お雪ちゃんに笑ひ消されたにも拘らず、米友がそれからまた、何かちつと一思案をはじめ、爐に赤々と燃えてゐる火に眼をつけて放たなかつたのは、やゝ暫くの間のこと、やがて、その面を上げて、眼をまたしてもお芋の皮をむくお雪ちゃんの手計に据ゑながら、

「お雪ちゃん、お前はお嫁さんに行く氣は無えのかい」

「忌な米友さん」

お雪ちゃんは、はにかんだけれども、米友は眞面目なもので、



「おいらは、思ふがな、お雪ちゃん——若い娘はなるべく早くお嫁に行つた方がいゝと思ふんだが……」

「まあ、米友さんが、お爺さんのやうなことを云ひ出しました、ホ、ホ、ホ」

「おいらは、爲を思つて云ふんだぜ」

「それは、わかつてますけれどもね……ホ、ホ、ホ」

若い娘はなるべく早くお嫁に行つた方がいゝ、つまり虫のつかないうちに、戀愛を知らないうちに結婚せしめよ……主婦之友の相談係でも云ひさうなことを、米友の口から聞かされるのが、お雪ちゃんには豫想外だつたのか、但、相手は所謂ためを思つて呉れて親切に云ひ出されたものに相違なからうが、お雪ちゃんとしては、さういふことに觸れると何か現實の慘ましいとげにても刺されたやうな氣にもなると見え、

「米友さん、そんな話はよしませうよ、長濱で見た、何か珍しいことをお話して頂戴な、長濱つて處は、昔大閣様のお城があつたところでせう、今でも人氣が大様で、大へんいゝのですつてね」

「うむ、湖邊へ出ると、なか／＼景色はいゝな」

「綺麗な娘さんがゐたでせう」

「さあ、それはどうだつたか」

きれいな娘がゐたかどうかその事はあんまり米友としては觀察して來なかつたらしい、併し、お雪ちゃんの綺麗な娘さんがゐたでせうと、わざ／＼尋ねたのも別段心當りがあつて云つたのではなく、京都は美人の本場、長濱も京都に近い處だから、婦人達も相當に美しいだらうと、斯ういふ淡い想像に過ぎなかつたのです。

「大通寺つて大きなお寺がありましたでせう」

「さうさなあ——別においらはお寺を見に行つたわけぢやねえんだが」

「あのお寺の大きな床一杯に、狩野山樂の牡丹に唐獅子が描いてあつて、とても素晴らしいのですつてね、米友さん見なかつた？」

「おいらは繪を見に行つたわけぢやねんだ」

「ぢや、そのうち、出直して一緒にまゐりませうよ、長濱見物に……」



「もう少し待ちな、今は世間が物騒だから」

「どうしてよすか」

「どうしてつたつて」

そこで米友は、今日経験して来た處の要領をお雪ちゃんに向つて物語つたのです、さうすると、お雪ちゃんが眼を丸くして、

「まあ——よく無事に來られましたねえ」

容易ならぬ危難を突破して來た米友の冒險をはじめて知りました。

さうして見ると、新婚當夜ほどの新しい氣分を與へて呉れる今晚の調度も、相當の犠牲なしには得られなかつた恩恵であることが一層深く感ぜられ、お雪ちゃんは幾度か米友の勞をねぎらつて、やがてお芋の皮をむくことが終ると、お茶を入れ、お茶菓子を出して二人で飲みはじめました。

## 十九

二人がお茶を飲みはじめると、急に自在の新鍋が沸騰しました。

これは、あんまり二人が仲よく茶を飲んでゐるものですから、新鍋が嫉妬を越して沸騰をはじめたといふわけではありません。

もう煮え加減が丁度沸騰すべき時刻に達したから沸騰したまでのことで、沸騰すると同時に鍋の蓋のまはりから熱湯がたぎり落ちかゝつたのも極めて當然であります、が、その沸騰の泡が火の上に落ちて、そこで烈しいちんぷんかんぷんが起り、灰神樂を立てしめることは、甚だ不體裁でもあり不衛生でもあり、第一、またその灰神樂に折角の静かな室内と新しい調度を思ふまゝに攪亂せしめた日には折角の新婚當夜のやうな新しい氣分が臺無しになるのです——そこは米友が心得たもので、いざ、沸騰と見ると、飲みかけた茶碗を下へ置いて、つと猿臂を伸ばして、その蓋を一旦宙に浮かせ、それから横の方へとり除けて、座右の眞向のところへ上向に置いたのです。

それが爲に空氣の壓力も急に加はつたものですから、沸騰力も頓に弱められて、危く灰神樂の亂調子で一切を攪亂せしめることを免れしめました、斯ういふ早業にかけては、蓋、



米友は天才の一人であります。

さて、鍋蓋を取り拂つて見ると、新鍋の中は栗でした。

最前から、既められてゐた鍋の中のものには栗が茹でられてゐたのです、さうすると、お雪ちゃんも、火箸を鍋の中にさし込んで、そのゆでられた栗の中から大きいのを一つ摘み出して、さいぜん米友が上向きに爐の眞向のところへ置いた鍋の蓋の上に載せ、

「友さん、茹だり加減はどうですか、一つお毒見して頂戴な」

「よし来た」

米友は、それを受取つて吹きさましながら皮を剥いて、食べ試み、鹽梅を見ながら、

「おうさ、もう一時茹でた方がいゝだらう」

「Yes」

で、新鍋は蓋を取られたまゝ熱湯を縁から落さない程度で頻りに沸騰をつゞけて居りました。

「明日は、これでキントンを拵へて友さんにも御馳走して上げますよ」

「有難てえ」

きんとんをこしらへて、友さんにも御馳走をしてやるといふ言葉で、友さんにだけ御馳走するのでなく、友さん以外の人にも御馳走してやるといふ心構へがよくわかります。

事實——お雪ちゃんが、斯うして引續き野菜物の料理専門にかゝつてゐるのは、この變態家族の賄方を引受けてゐるといふのみならず、此の頃入れた幾多の普請方の大工、左官人足等にまで配布すべきお茶受けの糺までもその手であしらつてゐるのでした。

併し、もう料理方の日課としての大ていは済ましてしまつて、今はこの栗のゆだり上りを待つだけの閑散になりましたから、そこでまたお茶を一ばい。

二人は斯うして静かな秋の夜にひたり得る無心の境地を味ひました。

## 二十

斯くて、二人は、極めて無心、平和、閑寂なる空氣のうちに茶話を楽しみましたが、暫くして仲よく鐘勘定にかゝりました。



その時分には、もう栗もすつかり茹だり上つたから、新鍋は現役を退いて流元の方に差控へさせられて、新鍋の代りに古い程味の出るといふ南部の鐵瓶が燻ぶつた舊地位を自在の上に占有してゐます。

米友が爐邊に近く擦ぎ出した千兩箱、それを座敷の眞中に、ザクリと引くり返した時に二人が思はず眼を見合せました。

深夜の物音としては、意外にそれが響き過ぎたからです。

その以前、根岸の化物屋敷で、七兵衛所有に屬する金箱を、お絹に唆かされた神尾主膳が突き破つて見たやうなあんな不義不正なる物音とは比較にならないが、併し、静かな夜中に思ひの外、異つた大きな音がしたものですから、二人は面を見合せたのみならず、お雪ちゃんの如きは蛇にでも襲はれたものゝやうに、遠く一間ばかり飛びのいた位でしたけれども、つもつて見ればこれは少しも怖ろしい性質のものではなく、れつきとした所有主のお銀様から用心棒としての米友が託されて、長濱まで兩替に行つて來た此の金錢——それを今、保管と收支とを託されてゐるお雪ちゃんが、手にかけて米友に手傳つてもらつて

計算に當らうといふのだから、形式に於ても、良心に於ても少しも咎むべき筋ではないのであります。

ですから、一旦脅迫觀念に襲はれたお雪ちゃんも、忽ち思ひ直して近く寄つて來て、散亂したのを掻き集めながら、改めて米友と共にこの小錢の山の取り崩しから計算記帳にとりかゝりましたのです。

この小錢の種類によつて、ザクリ／＼と別けて數へながら云ひました。

「有るところにはあるもんだなあ、金といふ奴は」

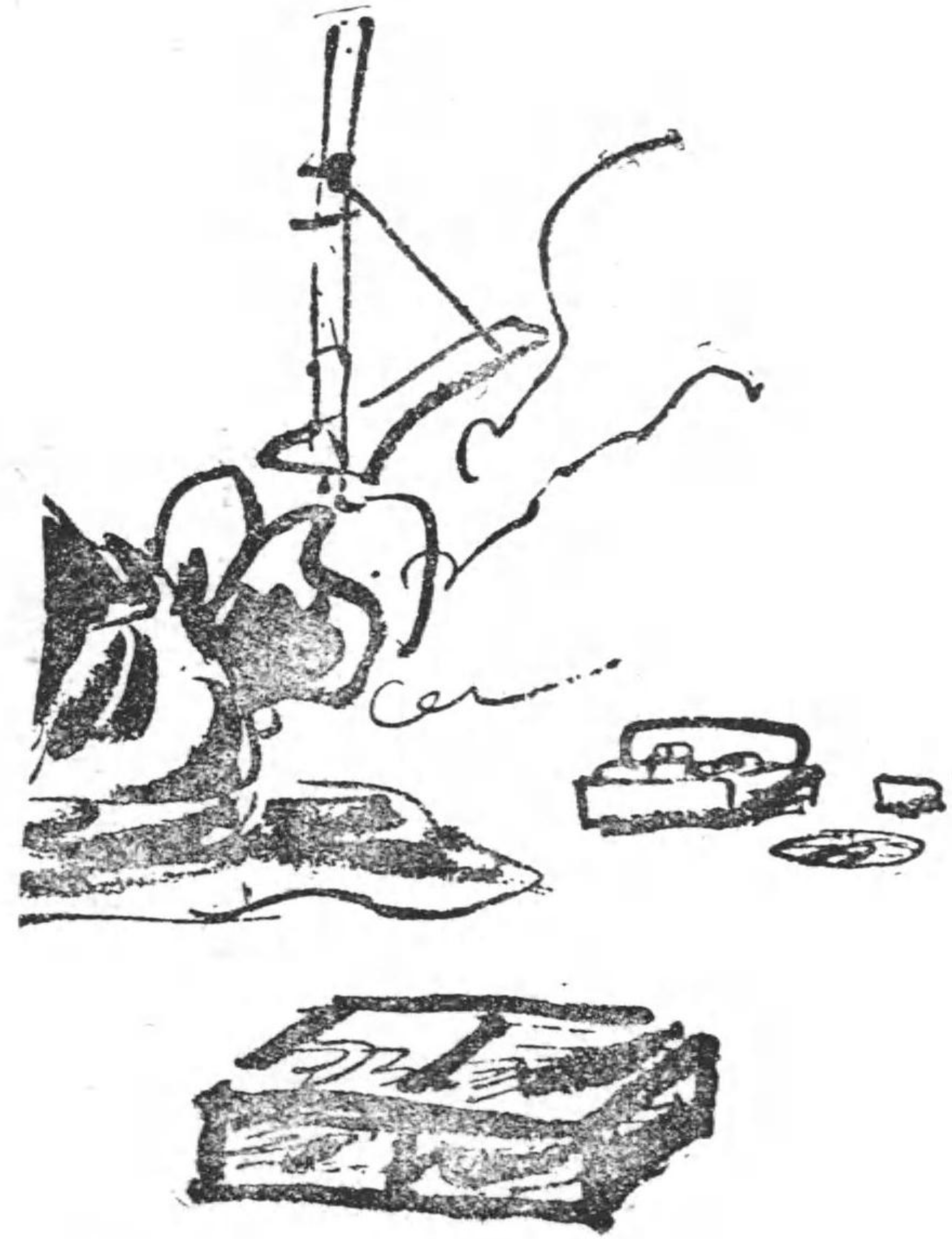
「ほんとに、さうですね、有る處には有るものです、あのお嬢様のお家には、一體どの位あるんでせうかしら」

とお雪ちゃんが相槌を打つと、米友公が、

「有るところにはあるが、無えとなると丸つきり無えのが金だ」

「全く、その通りよ、お金持の處には唸るほどあつても、貧乏人の處には薬にしたくもないのですから」







「有るところには有り過ぎるほどあつて、無えところには無さ過ぎるほど無え、その癖、誰も皆んなこいつを欲しがつてゐることは同じなんだが、どうしてまた此奴が集る處へはうんと集り、來ねえ處へは些つとも來やがらねえんだらう、ケチな野郎だな、この錢金といふ野郎は……」

米友は數へかけた天保錢を二三枚取つて疊の上に叩きつけました。

## 二十一

宇治山田の米友は特に錢金に數々の恨みがあるといふわけではないが、また生い立ちからしてもさう多分に錢金に恵まれつゝ育つて來た男ではないこと申すまでもありません。

だから、特に錢といふものを呪ひ憎んだり、また其の錢の集積によつて勢力を得つゝある資本家といふものに、特別の戰鬥意識は持つてゐなかつたのですが、時々思はず、昔の事を思ひ出して、錢の記憶といふものに、あんまりいゝ氣持のすることばかり無かつたことが、むらくと頭へ上つて來たものですから、そこで無意識に錢を疊の上へたゞきつけ

て見ただけのもののでありました。

この時、宇治山田の米友が、殊に錢金について、あんまりいゝ印象ばかりを思ひ起さなかつたといふ頭の中を解剖して見ると、略ぼ次の如くであります。今、斯うして夥しい錢勘定をさせられて見たところで、急に赤い方へ轉向の謀叛氣をそゝのかされたと見る理由もなく、また事實上、この男は、性質は單純であるけれども、意志は鞏固ですからさう輕々しく右になつたり左になつたりする男ではないのです。

處で、たつた今、急に錢を浚つてやけに投げ出して見たのは、一時むくれて見た持前の肝癢に過ぎません。

宇治山田の米友は、伊勢の國に在る時に、神宮の前の宇治橋の下で鬻受けをして生業を立てゝゐたことは先刻御承知のことであり、彼はなほ御承知の通りに、槍の妙術から來るところの藝術的天才を持つてゐましたから、他の子供よりもその収入が多かつたことは當然でありました。

併しながら、この商賣といふものも、ゲツキユウゲツキユウと靴を鳴して、ならしに身入



のある商賣でありませんでしたから、雨が降つたり、雪が積つたりする事に妨げられる商賣でありました、日によつて参詣客の投げ銭のはづむ日もあればはづまない時もあるのであります、そこで米友と雖もあぶれて歸ることもないではありませんでした。

米友があぶれるくらの時は、他の網受の子供は全くみじめなものでした、彼等はその日その日は相當のものを持つて歸つて親方に提供しないことの代りには或は折檻となり或は締出しとなり或は飲食となつて反應することを米友が知つてみました、さういふ場合には米友は自分の持つてゐた収入を殆んど残らず分けてやつて、さうして彼等の受くべき折檻と締出しと飲食とを自分が代つて満喫せしめられたことも子供の時分に一度や二度ではなかつたのであります。

さういふ時に米友はしみくと、錢といふものゝ魔力を思ひ知られせられたことでありました、僅か幾文の錢がありさへすれば、自分達はこの虐待と飢餓から救はれる事だ——錢があればいゝなあ、と米友は夜の寒空に軒端の縁に腰かけて尾上山つゞきの星を數へ、間の山の灯の赤いのをうらみわびながら明かしたことも一晩や二晩ではなかつたのであります。

しかし、さういふ時に米友はお君の處へ相談に行くことをしなかつたものです、お君へ相談に行けば、お君がまた氣の毒がつて身の皮をむいて身代りをして呉れるに定つてゐる、他の苦しみを自分が背負ふのはやむを得ないが、それを又背負ひきれないで他に轉嫁するといふことは、結局苦しみの監廻しをするだけのこと、苦しみそのものゝ救ひにもならないし、解消にもならないといふことを米友はよく知つて居りました。

そこで米友はガツチリと齒噛みをして飢と寒さに顫へながら、曾て一度びも苦痛の聲を濁らしませんでした、しかしながらさういふ場合に大樓の店先きなどを通つて錢金を湯水の如く遣ふ人や、物賣りの店棚で甘い御馳走の臭ひをブン／＼嗅がせられた時など、彼もクラ／＼と眼がくらんでフラ／＼と足が顫へることがありました、それにも拘らず遂にこの男の正義心がピタを一枚盗むこと、物を一つちよろまかすことを絶対に許しませんでした。

それから、あんなわけで故郷を立ち退いて乞食同様になつて東海道を下つて來た間、どの位自ら錢の無い旅の苦しみを味はせられ、また一方どの位錢の有餘る旅客の養澤振り



を見せつけられたか知れなかつたのですが——この男は錢の有り難味を知りながら遂に錢の誘惑には負けたことがあります。

米友は今、痛切にその事の記憶をよみがへらされたのですが、そんな思出話をスラ／＼と或はペラ／＼と話し出す男ではありません、何とも名狀し難い、越し方の道の思ひ出をガツチリと齒を喰ひしばつて、縛りつけようと試みてゐたのですが、その事の想像の以外は、どうしてもお君の事にうつらないといふ筈はありません。

「あつ！ 忌だな」

米友が、思はず斯う云つて唸いたのが、お雪ちゃんを少し驚かせました。

「どうしたのです、米友さん」

「どうもしやしねえが……」

と云ひながら、米友が、やゝあはてゝ、また事改まつたやうに錢勘定に取りかゝると、今度は不意に程近い處で、バサ／＼と聞き慣れぬ物音が起つたので、却つて米友が驚かされました。

「何だい、ありや」

と云つてゐる處へ、續いて、同じやうにバサ／＼の音が前よりは一寸手強く響きましたので米友が數へかけた錢を置いて、音のした方を見込みながら、その手は我知らず爐邊に置いた杖槍の方へのびてみると、お雪ちゃんが却つて落ついて、

「米友さん、吃驚しなくてもいゝわ、あれは鶯の子なのよ」

「え？ 誰れの子なんだつて？」

「鶯の子なんですよ、ほら、鶯といつて鳥のうちで一番大きくて一番強い鳥、あの鳥の子供がゐるんですよ」

「へえ……鶯の子がかい、どうして、何處に」

「わたしが飼つてゐるんですから、心配しなくつてもようござんすよ」

「どうして、お前、鶯の子なんぞを飼ひだしたんだえ」

「どうしたつて、それにはわけがあるのよ、お銀様が村の人から買ったその鶯の子をわたしに預つて世話をしてゐます、それが今羽ばたきをしたところなんです」



と、云つてゐるうちに、たしかに納戸の方にあるその鶯の子なるものが、またも續けざまに二度三度羽ばたきをしました。

## 二十二

米友としては、お雪ちゃんの説明で、一應納得したけれども、まだ心残りはあるので、鶯の子の存在はそれでいゝとしても、今まで静かにしてゐた鶯の子をして、突然斯うもあまたたび羽ばたきをさせるやうになつたその誘因といふものが相當氣にかゝるらしい。

併し、鶯の子の羽ばたきは、それだけで兎も角おしまひになつて、あとは以前にも増して静かな夜に返りました。

さうして二人の錢勘定に一層身が入るものですから、その錢の音だけがザラリ／＼と深夜の疊の上を我が物顔に走るのです——初めのうちはさうでもなかつたが、あまり静かになつてしまつたものですから、その錢の音が——自分で數へて自分で音を立てゝゐながらお雪ちゃんが、つい、何だか怖いやうな感じに襲はれてしまつて、遂には思はず助けを求

めてるやうな氣持にまでなつて、米友の方を見ると米友は別段錢の音に恐怖も戦慄も感じてはゐないで、うつむき加減に數へてはザラ／＼とやつてゐます、そこで、お雪ちゃんは米友の數へる錢の音までが加勢して自分の恐怖心に向つて食ひ入つて來る様な氣がしてたまらなくなりましたから、米友に向つて何か話しかけて氣を紛らさうとしましたが、生憎急に持ちかける話題が見當らず、何だか舌がもつれるやうで何と云ひ出したらいゝか、戸惑ひをしてゐたが、やがてやつと、

「米友さん、米友さん」

「何だい」

と、米友は相變らず下を向いて平然たる返事なものですから、それに少しばかり勇氣をつけられて、

「武州の高尾山ではね……」

「うむ」

「武州の高尾山の奥の院で、ある晩に天狗様が斯うしてお錢の勘定をしてゐましたと云」



「天狗様が錢勘定をかい、イヤに、み、つ、ち、い、天狗だなあ」

「さうするとね、次の間で、どろぼうがそつと立ち聞きをしてゐたんですとさ」

「成程——」

「ところが、どうでせう、そのどろぼうが天狗様の錢勘定をしてゐる次の間の壁板に耳をくつつけて立ち聞きをしてゐるうちに、その耳が壁へすつかりくつついてしまつたんですとさ、天狗様が、誰だ、そこで立聞きをしてゐる奴は……と叱つたものですから驚いてその盜賊が逃げようとしたが、板に耳がくつついてしまつたものだから離れられないのです、で、たうとう小柄を抜いて自分の耳を切り裂いて逃げたといひますがねえ、その耳の附いた板が今でもあのお山に遺物となつて残つてゐるさうです、それを思ひ出したせいかわたしはあんまり靜かにしてお錢を勘定してゐると、次の間で誰れか立聞きをしてゐるものがあるのぢやないかと思はれてなりません、米友さんは」

「おいらは何とも思はねえが、どうも誰れか人が来るやうな氣がするにはする」

「それ御覽なさい、わたし、どうもさつきから、何かわたし達の背後に来てゐるものがあ

るやうな氣がしてなりません」

と云つた時に、突然入口のところで、

「は、は、は、は」

といふ笑ひ聲がしたのでお雪ちゃんも米友も、びつくりして錢勘定の手を休めて、その笑ひ聲のした方を見やると、ガラリと潜り戸を明けて平氣な面であつて来て、上り框に腰をかけてこちらを見ながら、にや／＼と笑つてゐるのをお雪ちゃんが見届け、

「あら、不破の關守さん」

「お二人さん、よく御精が出ますな、お寶の勘定は悪くないものでござんせうな」

とお世辭を云つたのは、二人共に充分納得の行く、この新屋敷の同居人、不破の關守の關守氏でした。

### 二十三

同居人とは云ひながら、離れた、本館の方に在つて、常にお銀様の爲に工事と計畫の參



謀とその監督に當つてゐる人ですから、突然斯うして此處へ來ようとは思つてゐなかつたのですから、意外といふのは、たゞ、それだけなのです。

「よくいらしゃいました、どうぞこちらへ、おや、何處ぞへお出でのお歸りでございますか」

と、お雪ちゃんが關守氏の相當な足ごしらへを見ながら、爐邊に請じますと關守氏は、  
「いや、拙者も長濱まで行つて参りましたよ、お銀様から急用を頼まれてな、その頼まれた急用といふのは他ぢやありません、友造君を迎へに行つたのです、友さん、よく無事で歸れましたね」

「そりや、出て行つたもんだから、歸るのが當り前だあな、お前、わざわざ迎へに來て呉れなくつたつて、おいらあ一人で歸れるよ、女子供ぢやあるめえし」と、米友が云ひました。

「勿論、女子供ぢやない、常人以上に勇敢なる友造君なればこそ、お銀様もわざわざ君に兩替の宰領を託したわけなんだが、もしやあの百姓一揆の渦の中に捲き込まれるやうな事

になりはしないか、それを心配したのだから」

「そんな事あ無え」

と米友が力むのを、お雪ちゃんが、

「まあ、百姓一揆？ 何か騒動が起つたのですか」

「お雪ちゃん、あなたはまだ御存知ないのですか、長濱在で代官を相手に農民共が一揆暴動を起してしまつて容易ならぬ事態に陥つたといふ風聞が此處まで聞えたものだから、それでお銀様が心もとながつて、さうして拙者に友造君を迎へながら容子を見て來て呉れといはれたものだから、早速單身で斥候に出かけて見たが、いや、事態は全く重大でうっかり近づけない、そこで兎も角近寄れる距離に近づいて探れるだけの事情を探訪して漸く今引返して來たところなんだがな、取敢ず此處へ駐けつけて外で容子をうかがつてゐると、友造君が無事に立ち戻つたことの確かなのを知り、ホツと安心したといふわけなんです」  
「は、あ、さうか、それでわかつた、誰か外に人がゐるやうだとさうは思つてゐたよ」

と米友は何か思ひ當る處あるものゝ如く、ひとり合點の聲を立てると、關守氏は、



「さういふわけだから、まだお銀様にも復命してゐないのです、一刻も早くお館の方へ行つてお銀様にその事情を話して明朝になつてまたとつて返して、こちらへやつて来て委細をお話し申ませう」

といつて關守氏は立てともしにして置いた提灯を取上げてまた同じ口から闕を跨いだが、一休宗純から問答をでもしかけられたやうな形になり、片足は外へ出して、

「ところで、さしあたり一つ心配なのは、その一揆暴動の崩れが或はこの邊へ押し寄せて來ないとも限らない伊吹山といふ處は昔から落人の本場なんだから——そこを一つ念の爲に用心をして置いて下さいよ、一時にさう潮の押寄せるやうにこゝまで押し寄せて來る筈はなからうけれども、一人、二人、どちらのどんな奴が迷ひ込んで來ようとも知れぬ、戸締りをよくして置いて下さいよ」

斯う云ひ置いて、外の闇の中に身を没しました。

「友さん、よく戸締りをして頂戴」

「大丈夫だ」

「今、關守さんが出て行つた入口を、しつかり締めて錠を卸して頂戴な」

「なあに、あれはたゞ用心の爲に云つただけなんだから」

「でも、用心の上に用心に如くはなしですから、もうすつかり締めてしまひませうよ」

「ちや、お前の安心の爲に……」

と云つて米友は立ち上つて、土間へ下り、關守氏が入つて來た處の出入口をびつたりと締めきつて、櫃をカタリとおろしてしまひ、

「これで、すつかり締めきりだ」

「廊下のしまりの方もお頼み致しますよ」

「よしきた」

すべて抜かりなく締めきつてしまつて、さて二人共、以前の座に戻つたけれどもお雪ちゃんはまだ絶対的錢勘定を繰返さうといふ氣になれませんでした。

そこで米友は箱を取つて穴あき錢をそれに差込んでみると、暫くあつてお雪ちゃんがその手を抑へるやうにして、



「今晚はもうこれだけにしませうよ、何だか怖いから、お錢の音をさせないで頂戴な」  
お雪ちゃんから哀求的に云はれたので、米友も強ひてとは進みきれない心持になりました。

斯うなると、二人はもう寝ることだけの仕事が残つてゐるやうなものです、當然お雪ちゃんも云ひました。

「お寐みなさいな米友さん」

「お雪ちゃん、お前、先きに寐みな、おいらまだ眠くねえ」

「でも、随分疲れてるでせう、わたしがこゝにお蒲團を敷いてあげますから」

「いゝよ、おいらはゴロ寐でかまはねえんだ、お雪ちゃん、お前、先きへ寐な」

「でも、友さんを残して置いて、わたしだけ先へ寐るのは濟まないわ」

「遠慮は要らねえよ、おいらのことは人並に扱はなくていいんだからな」

「さういふ理窟つてありませんわ、あなたも人間なら、わたしも人間です」

と、お雪ちゃんが、妙なところへ人間平等論をかつぎ出したのは、米友に議論を吹かけ

るつもりではない、つまり、米友がおいらのことは人間並に扱はなくてもいいんだから——と云つたのが、聞きやうによつては、随分拗ねた僻んだ言分に聞えるのですが、米友のは、さういふ意味でなく、寧ろ自慢の意味も含んで——おいらの事は人並以上に身體が鍛へてあるんだから、人並の待遇をして呉れなくとも意とするには足りないのだと云ふ云ひ方なので、これはお雪ちゃんもわかつてゐるけれども、云ひ廻しが云ひ廻しだつたものだから、そこでお雪ちゃんも妙な人間平等論の切先きが出たわけなのです。

併し、お雪ちゃんは口前ばかりでなく、この時には甲斐々々しく立ち上つて、戸棚から夜具蒲團を取り出して、まづ米友の爲に一方へ敷き展べ、その間へ小屏風を立て、さうして、次に自分の爲にほどよき處へ蒲團を敷きかけた時に、又しても今まで静まり返つてゐた鶯の子が急にけたましい羽ばたきをはじめたものですから、蒲團を持ちながらハットしました。



鶯の子の又しても不意に、今度は以前より一層また慌しくけたましく羽ばたきをやり出したのに驚かされたのはお雪ちゃんばかりではありません。

米友も屹となつて、その時、鶯の子の羽ばたきのした方向よりは、ふり仰いで自分のゐる天井の上を見上げたのです。

「お雪ちゃん」

「何です、米友さん」

「何か來てゐるぜ」

「おどかしちゃ忌よ、友さん」

「おどかしちゃねえ、何か來てゐるんだよ、この上の方に、てんまるちや無えかな」

と云つて米友は天井の上を屹と見上げたまゝです、その途端に、鶯の子のなほ一層烈しい羽ばたきの音が連続的に響いて來る、お雪ちゃんはその羽ばたきの音の方だけが氣になるが、米友は却つて、それとは別角の天井上を首の覆れるほどながめ、且耳をすましながら、

「ほら、お雪ちゃんお聞き、この上の方でもう一つ羽ばたきの音がするだらう、あれ、木を食ひ切るやうな音が」

「ほんに……」

お雪ちゃんは耳を傾けると同時に桶を裂くやうな何とも云へない強い肉聲が聞えました。

「あ、わかりました、わかつてよ、米友さん、あれ〜あのお庭の松の木の上でせう」

「さうだ、たしかに松の木の上あたりだ」

「鶯が來たんですよ、親鶯が、この鶯の子を取り戻しに來たのです」

「さうか、そいつは……」

それから、物凄く鳥の叫びが屋根の上で起ると遽かに大風を吹き起したやうな物音が例の松の大木の上でする、さうするとその聲と物音とを聞きつけて、こちらの鶯の子がバサバサガタビシともう矢も楯もたまらずに檻の中で飛び狂ふのが手を取るやうに聞えるのです。

米友は、そこで、杖槍を引き寄せて見ましたけれども、さし當りどちらへ向つていゝの



か戸惑ひの形です。

お雪ちゃんは、たゞオド／＼してゐる。

如何に短氣一徹な米友でも、これはちよつと相手に取り難いものがあるのです、事情によつて判断すれば、この戸外の松の大木あたりに猛鳥が来て狂つてゐることは事實だが、それは何も我を襲ひに来たわけではない、親として子を思ふといふ徹底的に深刻純眞なる本能が如實に現はれたといふまでの事であり、一方はまた何も我々を驚かし騒がせんが爲にむやみに羽ばたきを試みたといふわけでもなく、捕はれの身の子として、親が戸外まで迎へに来てゐるといふことを知つて見れば、居ても立つても居られないのは、何人と雖も見易きこれも單純にして深刻なる本能の發動に過ぎないのであります。

併し——天上天下一切萬象が皆この單純なる本能によつて支持されてゐる。

お雪ちゃんも語らず、米友も問はないけれど、この物の道理は、ひと二人の胸にこたへてゐます、ですから、米友は得意の杖槍は取りは取つたけれども、これを持つて外なる親に向ふべきか、内なる子を戒しむべきか——途方に暮れてゐるのも亦、已むを得ないも

のがある。

「やかましいやい！」

と、米友が思はずおだんだを踏んで、斯う云つて怒鳴りつけて見ましたけれど、その鷹には毒を含んでゐませんでした、そののみか、その眼に何となしに露を帯びてゐる。

「やかましいやい！ いゝ加減にしろ、鳥！」

最初は天井を見上げて云つたのが、次には軒の方に向つて呼びました、お雪ちゃんも本最初から途方に暮れて、

「友さん」

「うむ」

「どうしようねえ」

「どうしようつたつて、やかましいやい、鳥！」

米友が二度、おだんだを踏みました。

この場合、さすがの二人も、上と下とで、かけ合せる鳥類の猛絶叫の爲に完全に壓倒せ



しめられたやうなものです。

その結果、二人共全くの沈黙に陥れられてしまいました。だが上と下との鳥類は、單に一方が一方に彌次り勝つて一方を沈黙させればそれで勝利の満足の快感に酔ふといふスポーツ的興味の爲に啖いてゐるのではないのですから、内なる二人が沈黙しようとするまいとも、その怒號と喧噪とをやめることではありません。

たゞ不思議と思はれるのは、高い樹上で怒號してゐる親鷲なるものが、なぜもつと近く庭上、少くとも地上まで降りて來ないかといふことであります。いかに猛禽が降り立つて肉薄して來たつても、戸締りは最前がつしりとしてあるから室内まで異變を及ぼすといふことは、萬無いに定まつてゐるが、こゝまで來て、あゝして騒ぐ上は、たとひくろがねの垣根一枚が破れようとも破れまいとも、もつと近く肉薄して來なければならぬと思はれるのに、聲の烈しくして切なる割には距離が遠くして高過ぎる嫌ひがある。

併し、いよく加はつて來る絶叫を、全く沈黙して聞くだけでは、聞く方がやりきれたものでない。

「叱ッ、叱ッ、こん畜生」

と罵りながらちだんだを五たびも六たびも踏みましたけども、結局、出て行つて追ひ拂はうとするでもなし、咽喉笛を抑へつけて鳴かせまいとするでもない。

「困りましたねえ」

お雪ちゃんは敷きかけた蒲團を吹き流しのやうに持つたまゝ天を仰ぎ軒をながめて所在に窮してゐる。

米友は、遂に折角手にした杖槍を投げ出して爐邊へ來てどつかと小さな胡坐をかいてしまひました。お雪ちゃんが敷かけた蒲團を抛り出して、

「あれ、また、あんなに鷲の子が荒れ出しました、籠をこはしてしまやしないかしら、友さん、どうかして頂戴、籠をこはして飛び出されては大變ですから」

「待ちな」

と云つて、一旦、爐邊へ坐りこんで見た米友はまた立上つてその鷲の子の猛然たる羽ばたきのする納戸の方へ行かうとすると、お雪ちゃんが早くもその新しい調度の一つなる行



燈をつり下げて、米友の先に立ちました、米友の爲に案内して鶯の子を預かつてゐる次の納戸の隅の方へと光を持つて行くのです、間もなく米友は大きな鏡の四角な鳥籠を一つ抱へ込んで、こちらの座敷へ持ち込みました、人間に抱へられたと見ると、なほ一層羽ばたきと、暴勢とを加へ、また一種名状し難い哀叫怒號を加へて荒れ廻るのを、米友は籠ぐるみ午夢抜きにした恰好で抱き出して来て、さうして爐邊の一方へ押し据ゑたが、動搖を防ぐ爲に、のし板を持つて来てあてがつた上に澤庵石か何かを臨時の押へとして重しをかけ、さて自分は、以前の爐邊へ戻つて、どつかと小さな胡坐をかいて、爛々たる眼を見開かしてさうして籠の中を注視、監視の姿勢を取りながら、その處分方法を考へ込んでゐるものらしい。

## 二十五

斯く、内と外と相呼應する物騒がしさのうちに、宇治山田の米友は、泰然として、坐りこんで見たものゝ、實は米友としては、餘儀ない次第なので、さすがに生一本の此の男も

ほとく手のつけやうが無いのです。

お雪ちゃんは、もとより、おどくとして爲さん術を知らない。

しばらくあつて、決然として米友が立ち上りました。

決然として立ち上ると共に、猛然として、籠の上の、のし板を取り拂つたと見ると、その籠を力にまかせて、肩の上まで、かつぎ上げましたからお雪ちゃんが、

「友さん、どうするの」

「仕方が無えから……」

と云つて、米友は、雨戸の際まで、子鷲の入つた籠をかつぎ出して、そこで、片手でもつて心張棒を取り外し、鍵を上げて、カラリと戸を押し開いたものですから、お雪ちゃん

が、

「友さん、それを逃がしまつてはいけません」

「だつて……」



を開くやうに、籠の戸を引き上げにかゝたものですから、またもお雪ちゃんも、  
「友さん、逃がしちゃ、いけません、逃がしては、わたしが申譯がないぢやありませんか、  
お嬢様に叱られるぢやありませんか」

「だつてお前、子供を親許へ返してやるんだから、理窟はこつちにあらあな、もとく、  
親の子を、こつちが横取りしたのが悪いんだあな、慰みがてら、親の留守をねらつて取つ  
つかまへて来た子鷲なんだらう、だから、考へて見ると、此奴をこつちへ置くのが道理に  
外れたことで、返してやるのが人情だあな」

と米友が答へました。

「それはさうかも知れませんが、友さん、お前が預かつたんぢやない、わたしが、お嬢様  
から頼まれて、引受けたのですから、逃がしてしまつては、わたしが叱られるぢやあない  
の、わたしが申譯がないぢやありませんか」

「だがらいよよ、罪をおいらが着るからいよよ、申譯なら、おいらがしてやらあな、叱ら  
れるなら、おいらが叱られてやらあ、一體、お嬢様、お嬢様つて、あの女に、皆んながお

代官でもあるやうに恐入つてしまつてるのが、おいらにはわからねえ、お嬢様であらう  
とお代官であらうと、道理と人情に二つはねえ」

と米が答へました。

「そりや、米友さん、お前だけに通る理窟で、どつちにしても困るのは、わたしよ」

「おいらだけに通る理窟なら、世間一般に通らなけりやならねえんだ、おいらは、まだ世  
間に通らぬえ理窟を云つた覚えはねえ」

と米友がお雪ちゃんの爲に、たんかをきつて、自分の信するまゝを強行しようとしてしま  
とお雪ちゃんは、ちよつと當惑をして、

「それはさうですけれども——」

「おいらが罪を被るからいよよ、お嬢様なんて、そんなに怖い女ぢやねえよ」

米友は遂に、籠を戸外の縁側へ押し出してしまひました、取り纏つて見たところで、お  
雪ちゃんの力では、米友の地力を如何ともすることが出来ません——だが、目に見えない  
あの暴君タイプのお嬢様の壓力がこの時も、うしろからひし〜とお雪ちゃんの脊中に迫



るやうに感ずるのに、米友は一向その邊に何等の氣象を持たないらしい、事實、今の世に、お銀様を恐れない人は、この男一人かも知れませんが、あの暴女王をつかまへて、目の前でボン／＼争ひ得るものは、まづお雪ちゃんの知れる限りではこの米友さんの外にはないらしい、さうして、多くの人が、腫物にさはるやうに、あしらひ兼ねてゐる前で、つけつけと物を云つて、自分も更に憚る處はないし、第一、當の暴女王その人が、黙つてこれを聞き流してゐるのみか、烈しく當られて、却つて暴女王が面をそむけて、米友の鋒先を避けようとする事さへあるのを見受けるのです。

米友は、遂に後へ向けた籠の戸を充分に開け拂つてやると、羽ばたきをして、丸くなつて、外の闇へ躍り出してしまつた鷺の子。

その途端に、さわがしい羽風を切つて松の枝下から、ある程度まで、舞ひ下つたらしい大鷺——それと迎合しようとして、まだ脾胃弱い羽をして、空中に向つて、羽ばたきをする子鷺——。

やゝ暫く、空中と地上との闇の宙宇で、二つの鷺が舞ひつ躍りつしてゐたものゝやうで

あつたが、やがて、のしきつた羽風の音が、伊吹山の山上へ向つて、眞一文字にうなり出すと、それで、さしもの動搖が全く靜まり返つてしまひました。

つまり、解放された子鷺は、親鷺にすがり、取り戻しに來た親鷺は、首尾よく、捕はれの子を拉し得て、翼の上に戴せたか、爪でかき提げたか、暗いから、その細かい事はよくわからないが、完全に、わが子を取り戻して、さうして、親子は夜空に羽風をのしつゝ、古巢を目がけて飛んで行つてしまつたことは確實なのであります。

その時、米友は庭へ下りて、松の丸の大木の根方に立つて、鷺の飛び去つた方の、伊吹山の空をのぞんで突立つてゐました。

宇治山田の米友は、斯うして、しばらく空をながめて突立つてゐましたが、何となく名狀し難い、一種の空虚な感じが頭の中に沸いて來て、たまらなくなつたものと見え、松の根方に、またも二度三度、ちだんだを踏んで、

「馬鹿にしてやがら」と云ひました。



「馬鹿にしてやがら」

併し乍ら、誰も、この場で、米友を馬鹿にしてゐるものは無いのです、もし、米友を此處で馬鹿にしたものがあるとすれば、それは子鷲を拉し去つた親鷲でなければならぬのだが、あの二羽共に、米友に對して感謝こそすれ、馬鹿にしてゐる筈はないのです、畜生の悲しさに、何等の意志表示しては飛んで行かなかつたけれども、夜の中空を、羽風を切つて飛び去る猛鳥の姿は、米友をして一種豪快の念に堪へざらしめてゐた筈です、ですから、

「馬鹿にしてやがら」

と云つたのは、飛び立つて行つた鷲の親子に向けて發した怨言ではありません。

と云つて、此の期に及んで、お雪ちゃんに、飛ばしりを向けて劍突をくれて見よう理由はありませんから、結局、米友としては、的なきに矢を放つてゐるやうなもので、

「馬鹿にしてやがら」

それはまあ、一種の自己冷嘲として見ればいゝのです、だが、何の故に、此の際、自己

冷嘲を試みて自ら慰めるのかといふ論議の段になつて見ると、これはまた分析が相當にむづかしい。

何か、米友公には米友公相當の感情が、むやみに頭の中に群がつて來て見たり、また、それが急に遁逃して空虛にされてしまつたりする場合に、何處への的を置いて矢を放つていかかわからないから、そこで突發的に、

「馬鹿にしてやがら」

今も、たゞ、そんなやうなきつかけで、

「馬鹿にしてやがら」

と鼻の先で云ひ捨て、その途端に手にしてゐた例の杖槍の一端を取ると、それをグルリと半徑にブン廻しました。

杖槍を半徑にブン廻して見ると、自分の胸の筋肉が、かあんと鳴りました。

その筋肉の震動が、何となく米友に、一味の快感を與へたと見られます、それから、即座に立ち直つて、今度は頭の上へ持つて來て、ブン廻して美事に全圓を描いてしまひまし



## 二十六

米友の自己陶醉の幕はそれから始まりました。

甲府城下の霧の如法闇夜に演出した一人芝居は、あれは生命がけの剣双上の事でしたから前例にはなりません、信州川中島の月の夜にこそ、一度この米友の自己陶醉を見かけた事があるのであります。

今宵、たつた今、米友は棒を振り廻して見ることに、我ながら、絶えて久しい自己快感を覚えました。

それから、松の丸の松の根方の芝生の上で眞剣になつて型をつかひました、川中島の時は、たしか、月の夜でありましたが、こゝは、おろちの棲む伊吹山下、降るやうな星の夜であります。

今、米友が縦横無盡にその型をつかひ出しました。

それは何の型？ 御承知の通り、この男には特に何流何派の型といふのは無いのです、幼少の頃、淡路流を少し學んだといふことの外には師に就いた事はないが、その後、おのづから獨流の型は出来てゐるのです、本人はそれを型とは氣がつかないで、ひとり自己陶醉で、舞ひつ踊りつしてゐるやうなものだが、見る人を見ると、その、奇妙きてれつなる、型にあらずして、おのづから型に合つてゐる、只、惜しい事には、見る人に見せる場合にのみ、この男の藝術的昂奮が起らない事です、無心した處で見ようとしては見られず、無心しなくても突發的に、川の中であれ、山の下であれ、起るべき時に起るその藝術的昂奮と、自己陶醉——當人が見せようと思つてやるわけではないから、周囲が見ようと願つても見られない代物。

一ハ打シ、一ハ刺ス、棒ニ双無クンバ何ヲ以テ刺スコトヲ爲サン

今一双ヲ加フ、但シ双長ケレバ則チ棒頭力無シ、他ノ棒ヲ壓スルコト能ハズ、只二寸ヲ

可トス、形鴨嘴ノ如シ

打スレバ則チ棒ヨリモ利アリ、刺ストキハ則チ双ヨリモ利アリ、兩ナガラ相濟フ、一名



ヲ据ト曰フ、南方ノ語也、一名ヲ白棒ト曰フ、北方ノ説也。

孟子曰ク、梃ヲ執ツテ以テ秦楚ノ堅甲利兵ヲ撻スベシ……。

米友としては、前人の型を追はない如く、前人の説を知らないのだから、獨得の武器そのものも、暗合はあるかも知れないが、摸倣は斷じてない。

さればこそ、この自己陶醉によつて示す處の型のうちに「大當」の勢が現はれようとも「齊肩殺」の形が轉がり出さうとも「滴水」が「直符」に變化し、咄嗟に「走馬回頭」の勢に轉じようとも、進んでは「鐵牛入石」の形が現はれ、退いては「龍爭珠」の曲に遊び、或は「鐵門鎧」となり、或ひは「順勢打」となり「盤山托」となる、一肌一容、體をつくし、研を究めようとも、彼は學んで而して之れをなし得るのではないから、示して以つて能を誇るのでも無い、況んや銜うて以て鬪するものでないことは勿論である。

今や、米友は、むやみに愉快でたまらなくなりました、無論時間の處も頓着はありません、それも全く無理の無い事で、人はそれ〴〵その樂しむ處に於て三昧に入り得る特權を持つてゐるので、この男が唯一の藝術に、我が三昧境に、我を忘るゝはやむを得

ない事ですが、たゞ一つ他目に見て不思議な事は、お雪ちゃんといふものが、其の後、何等の挨拶をしてゐないといふ事であります。

「友さん、何をしてゐるの、イヤな友さん、一人相撲の眞似なんか、およしなさいよ」

とか何とか、呼びかけなければならぬ處なのですが、米友が陶醉境から遂に三昧境に入るまでの可なり長い時間を、悠々とこゝに一人遊ばせて置いて、お雪ちゃんその人が何等の注意を呼び起してゐないといふことが不思議でした。

そのうちに、米友も、夢からさめたやうに三昧境を出でるの時が來て、ホツと息をつくと、杖を松の樹に立てかけて、鍊鐵の肌にしむ玉のやうな汗を、腰にブラ下げた手拭で拭ひにかゝり、

「うんとこ、とつちやん、やつとこな」と云ひました。

何處で聞き覺えたか知れないが、こんな、譯のわからぬ言葉を口走る點は、たしかに幾分清澄の茂太郎にかぶれたものなせう。



そこで、沓ぬぎに草履を脱いで、以前の座敷に上り込まうとしたが、ふと妙な氣配を感じました。

一七二

## 二十七

「お雪さん」

當然、先方から呼びかけられなければならない處で米友の方でダメを押ししました。成程、自分ながら、さう思つて見れば、自分としては可なり長い時の間、遊戯を試みてゐたのだが、その間、お雪ちゃんはどうした、こつちはこつちで楽しんでゐたんだからいやうなものゝ、先方の身になつて見ると、

「米友さん——何をしてゐるの」

と一言、たしなめて見ても宜かりさうな場合であつたではないか。

お雪ちゃんが、今まで何とも云はなかつた、あの子の事だから、ゐるんなら何とか云つて呉れなかりやならぬ場合なんだが、一向挨拶がない處を以つて見ると、ゐないのかな。

居ないといつた處で、今夜この場合、何處へ行くものか、では、寝たのか、あれほど先に寝むことを考慮してゐた當人が、だまつて寝込んでしまふ筈も無からうぢやないか、して見ると、また一人おとなしく錢勘定でもはじめたのかな——それにしても變だ。

と云ふ氣になつて、米友が、のぞき込むのを先きにするやうにして座敷へ一足入れて見ると、行燈の光が、著しく暗くなつてゐるが消えたのではない、こゝまで來ても、お雪ちゃんも、何とも云はない、さうして、お雪ちゃんその人の影も見えない。

「おや」

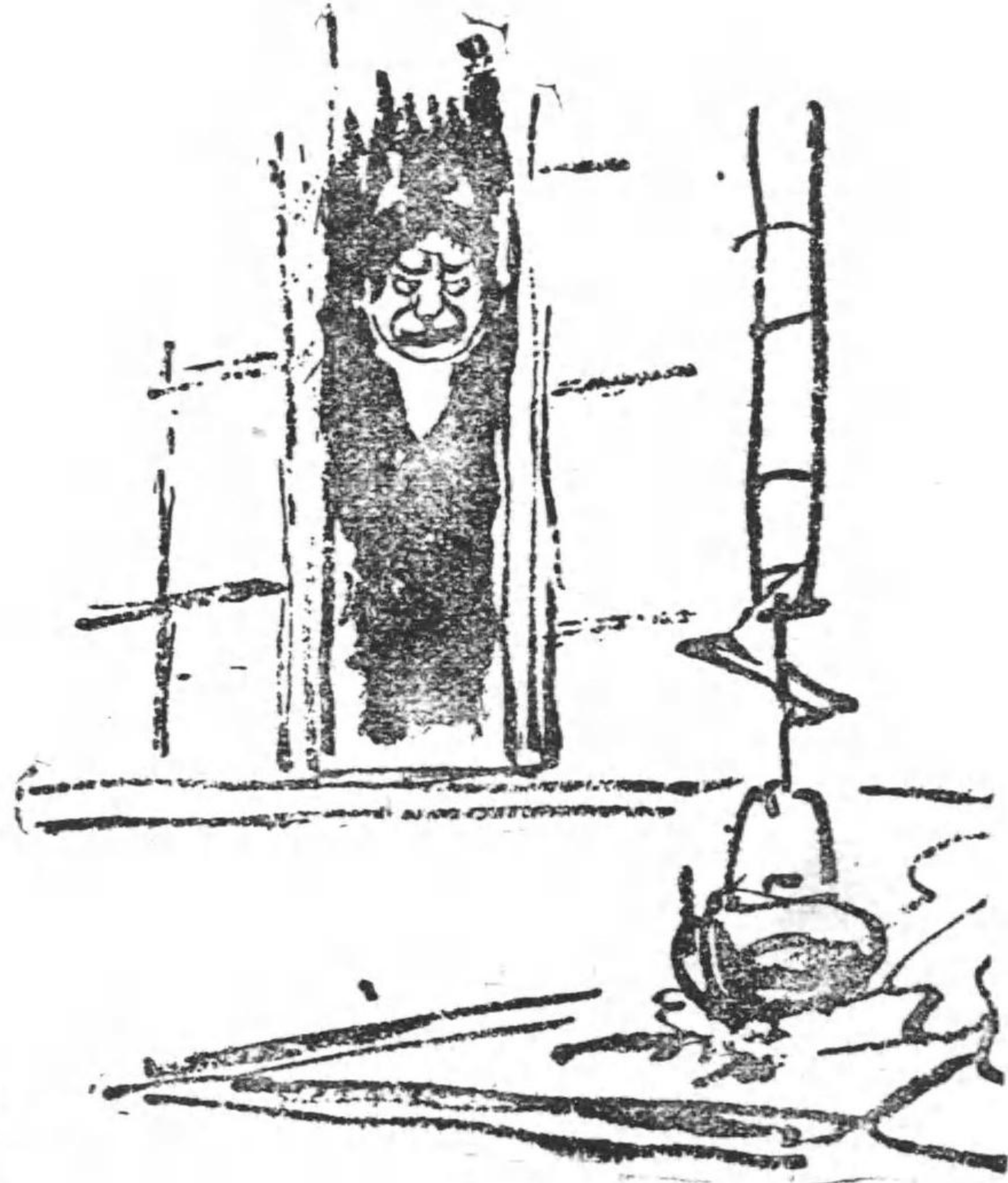
米友に忙はしく、座敷の四方を見廻したけれど、お雪ちゃんの姿は一向見えないが、その薄暗い行燈の光を通して、燃えくすぶつて、白い煙をたなびかせてゐる爐邊の彼方に人がある、一見、お雪ちゃんとは全く別な人間が一人、澄まし込んで座を構へてゐる。

「お前は誰れだ！」

と米友が、目を圓くして一喝しましたが、先方から手ごたへがありません。

返事はないけれども、人はゐるのです、姿は動かないのです、そこで、米友は圓くした





131



132



眼を据ゑて、ちつと、その薄暗い行燈の光と白くいぶる櫓の餘烟とを透して見定めると、蒼白い面をしてやつれきつた一人の男が、白衣の上に、大柄な丹前を羽織つて、火の方に向きながら頻りに自分の面を撫でゝゐる、最初はたゞ面を撫でゝゐるだけだと思つたが、その指先が長くヒラリ／＼と光るものだから、よく見ると剃刀を使つてゐるのだといふ事がわかりました。

つまり此の人は、澄まし込んで、こゝで面を剃つてゐるのです。

「お前は誰だ」

と二度、誰何した途端に、米友は先方の返事よりも早く、自分の胸に反應が来てしまいました。

「なあんだ、お前か、お前は一體、何處にみたんだ、さうして、いつこんな處へ入つて来たんだエ」

「雨戸が明いてゐるから、そこから入つて来たよ」

「何處から」

「君が出入をした同じ處よ」

「エ、こゝからかい、些とも知らなかつた」

これだけの問答で、米友は怖るゝ處なく、づか／＼と爐邊によつて来て、その不思議な來客と對角の爐邊に座を占めてしまひました。

この不思議な來客といふのは、米友とは古い顔馴染、最近關ヶ原以來の——机龍之助であることに疑ひはありません。

## 二十八

龍之助と對角線に坐つた宇治山田の米友は、無言で、じろり／＼と龍之助の爲さんやうをながめて居りました。

普通の人ならば、文句もあるだらうが、本所の彌勒寺長屋以來この人をよく知り抜いてゐる米友です。

天から降つたか、地から湧いたか、現在この座敷の締りは先刻、お雪ちゃんから念を入



れての頼みで、水も洩らさぬやうに締め切つてある、入つて来たとすれば、戸の隙間か節穴よりする外には入り道は無いのです、いや一つはある、それは自分がさいぜん籠を持ち出してから、自身庭へ出て、槍を振つてゐた間の、あの縁先の雨戸一尺五寸ばかりの間隔だ、然し、それとても、直ぐその直前で、自分が槍を振つてゐたのだから、取りやうによつては、締めきつてあるよりも一層の厳しい見張になつてゐる筈なんだが——そこを、潜り抜けて、さうして安然と此處へ座を構へ込んでしまつて、頻りに面を撫でゝゐる。

これは、他人ならば、米友自身の面目問題なのだが、此の人では仕方がない——と米友は観念してゐるらしい、彌勒寺長屋で一つ釜の飯を食つてゐる時にさへ、出し抜かれたのだから、今宵この場合は、型に心を取られてゐたおいらだ——油断と云へば油断だが、寢首を搔かれたわけではなし、特にこの人は例外である。

米友も、さういふ頭が出来てゐるから、深くは其の事を氣に病まないでゐたが、解し難いのは、その面を撫で廻す指先きに光る剃刀と、それから、なほよく見ると、その座右に置いてある櫛箱です、それもこれも——此の男がわざ／＼持つて来る筈はないと、咎める

までもなく、常日頃、米友がよく見慣れてゐるお雪ちゃんの持物なのであります。

いつの間に此の人はこれを持ち出したらう、閃々として波間をくゞる魚鱗のやうに、町辻々の要所々々をくゞり抜けて血を吸つて歸る此の人の癖は、米友に於てもよく心得たものだが——いかに潜入が得意の人とは云へ、はじめての室内へ入つて来て、櫛箱と剃刀と、それから、なほよく見給へ、ちやんと、下剃を濡らす爲のお湯まで汲みそろへてゐる、斯ういふ細かい藝當までが、出来るといふことは、あり得べからざることだ。

殊に後ろに、ふわりと羽織つてゐる丹前だつてさうだ、先程お雪ちゃんが、蒲團をのべようと云つて、戸棚を明けた時に、ちらりと見えたあれなんだ、あれを出して引かけて、さうして悪く落つきすまして面を撫でゝゐるといふ現象が、この男を理解しきつてゐる米友にも不思議でならなかつたのです、あんまり、それが不思議なものだから、米友は他の何事をも想ひわたる隙がなく、龍之助の面ばかり見つめてゐると、

「米友さん、あなた、さつき、外で何をしてゐたの」

今ごろになつて、それはお雪ちゃんの聲ですから、これにも米友が面くらはないわけに



は行きません。

一八〇

何處で、どんな面をして、今ごろこんな事を云へたものかと、振り返つて見直すと、紙戸のしきりから慥に半身を現はしたお雪ちゃん——。

につこり笑つて、こちらを見てゐる面が、薄暗い光の中に、いやに艶つぽい。

「お雪ちゃん、お前こそ、何處で何をしてゐたんだ」

「わたし……」

「お前がゐたのか、あねえのか、おいらは今まで気がつかかつた」

「先生がお出でになつたものですから……」

「それからどうしたんだ」

「いろく」と

「いろく」と、どうしたんだ」

米友は、いつになく険しく眼を光らせてお雪ちゃんを見つめて何事かを詰問するやうな調子に響きます。

「ねえ、米友さん、今夜、こゝへあの方をお泊め申して上げませう、いゝでせう」  
お雪ちゃんの言葉が、妙に甘つたるい。

「はゝあ、讀めた！」

と米友が、けたましく叫んで、龍之助とお雪ちゃんの面を忙がはしく等分に見比べようとした時、何に狼狽してか、お雪ちゃんの面が眞赤になつた——少くとも眞赤になつたやうな感じ——それと反對に面を撫でてゐる龍之助の面がいよゝ蒼白で、嘲けるやうな皮肉さへ交へて見え出して來ました。

## 二十九

「先生、こちらへいらつしやいよ」

とお雪ちゃんは龍之助の方を向いて云ひ、それから米友に對して、

「友さん、奥のお座敷をこしらへて置きましたから、あちらへ、このお方をお泊め申上げませう」



と、二人に向つて、同時に物を云ひかけました。  
「勝手にしろ」

とも米友は云ひませんでした、今まで姿を見せなかつたのは、つまり、この不時の珍客の爲に、奥の座敷に手入をして、請じまゐらすべき室をしつらへてゐたのだ。

「友さん、さうして、あなたは、何處へお寝みになさるの」

とお雪ちゃんも、まだ立ちながらの半身でいふ、米友はそれに答へました。

「おいらよりか、お前は何處へ寝むんだ」

「わたし」

とお雪ちゃんは、あんまりわるびれずに、

「わたしは、あちらで、先生のお傍へ寝ませていただきます——その方が、何かにつけて」

「うむ」

と米友は火箸をいぢりながら頷いて、

「おいらは、此處でい」

「では、こゝへお蒲團を斯うして置きますから、友さんの好きな處へお寝みなさいな」

「うむ」

「先生、こちらへいらつしやい」

お雪ちゃんはする／＼と歩いて來て龍之助の手をとつて、抱へるやうにして奥の座敷の方へ、疊ざはり靜かに歩んで行くのです。

無論、その時には、龍之助の方は面も一通り撫で終つて、剃刀も手さぐりで箱の中に納めてしまひ、軽く立ち上ると一方の手はお雪ちゃんに與へて、さうして、一方では刀を掲げて、する／＼と奥の間の方へ消えて行つてしまひました。

あとを見送つた米友は、ふゝむと一つ深く鼻息を鳴らして、さうして、そこはかたなく四邊を見廻したものです。

先きほどまでの、先きへ寝むの寝まないのといふ仁義と遠慮とが、こゝでは全く問題になりませんでした。



お雪ちゃんは、奥の間に、不時の珍客を案内したまゝで、此處へ戻つて來ない。早手廻しといはうか、米友の爲には、そこへ寢具が用意してある、その寢具がお雪ちゃんに代つて物を云つてゐる。

「わたし達は、あちらで寢みますから、友さんは此處でお寢みなさい」  
その時、米友が、一つのびを打つて、

「馬鹿にしてやがら」  
と云ひました。

奥の座敷の方は、人が入つて行つたとも見えない静かさです。

屋の棟には、猛禽の叫びもなく、籠の中には鶯の子の羽ばたきもありません、膽吹山の山腹の夜は、更けきつてゐる。

米友は爐中に三本の薪を加へました。

寢具にはあの時一瞥を呉れたまゝで、もう見向きもしないが、薪を加へた爐の火が赤々となつたのを、無意識にながめてゐるうちに、眞黒な南部の大鐵瓶が、ふつくと湯氣を

吐き出したのを、うつとり見入つて、米友の頭には、又、何かしら考へさせるものが流れ込んで來たらしい。

だが、此の男が、其の時、打つて變つたお雪ちゃんの舉動に對して、何等か嫉妬に似た不快な感情を刺戟され、それが爲に多少やけ氣味で、ふて返つてゐるのかと見ると、それは大きな誤解でした、一時は、ちよつと變な感じにうたれたに相違ないが、もう、こんな事にはタカをくゝつてしまつて、彼の頭は全く別の世界の追憶やら想像やらが留度なく流れ込んで來てその應接に苦しんでゐるものらしい。

たとへば、鶯の子を放してやつた事の連想から、尾張へ預けて來た熊の子の事になつて見たり——川中島の夜景の思出から道庵先生の事になつて見たりしてゐるうちに、此の男が爐邊でうつら／＼と居眠りをはじめてしまつた事によつても、此の場の出來事には、あんまり邪氣をさしはさまず、また、先刻、庭前で試みた懸命の型の遊戯が、可なり此の男を疲らせてゐると見えて、可なりいゝ心持で、爐邊の温かい火にあふられながら、夜舟を漕ぐといふのですから、先づ極めて平和なる光景と云はなければなりません。



本来、居寝りをするといふことは、心のゆとりといふよりも油断と云つた方が宜しい、殊に日本の爐邊では、居寝りをするには非常に危険なる油断の一つに數へられてゐる、何故とならば、こゝで、一步ではない、一頭をあやまると、目前は火爐なので、その上には鑊湯が沸いてゐる、よく、昔の田舎の子供は、この爐邊で、いゝ心持で居寝りをしてゐた爲に一頭をあやまつて、烈々たる爐中へころがり込むと、待つてゐたとばかり、上から鍋なり鐵瓶なりの熱湯がたぎり落つる、そこで肉身を烈火で焼いた上に、熱湯で仕上げるといふ念入りな結果になつて、一命を亡ぼすか、さうでなければ一生を見るも無残な不具として棒に振らなければならぬ、米友ほどの緊張した男が、さういふ危険な状態に身を置くことは不賢千萬のやうだけれど、また、見やうによつては、此の男なればこそで、どう間違つても、ざまあ見やがれとドヤされるやうな醜體を演ずることのないのは保証してもよろしいでせう、いや、改まつて、そんな保証をするまでもなく、此の男としては今日まで、一定の寢室と一揃ひの寢具によつて一夜を御厄介になることよりも、居た處、立つた處が、隨時隨處に、坐作寢食の道場なのだから、鑊湯爐邊の上に寐ることも、平常底の

一八六

修行の一つと見てよろしいかも知れません。

兎に角、米友は、こゝでいゝ心持に舟を漕ぎはじめた事は事實なんだが——それにしても奥の一間は……

### 三十

奥の一間の事は問題外として、白河夜船を漕いでゐた宇治山田の米友が、俄然として居眠から醒めました。

それは、慥かに、たつた今、軒を傳うて颯と走つたものがあつたからです。つまり、今時、この處を走るべからざるものが走つたから、それで米友が俄然として眼をさましたのです、走るべきものが走つたならば、米友と雖も、こんなに慌しく、居眠から醒める筈はありません。

然らば、此の際、この處を、走るべきものと、走るべからざるものとの差別は如何——これは六つかしい。

一八七